

# 博多 181

— 博多遺跡群第 224 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1448 集

2022

福岡市教育委員会

# 博 多 181

— 博多遺跡群第 224 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1448 集



2022

福岡市教育委員会





1.SK07出土 青磁小碗



2.SK07出土 青磁浅碗



3.SK07出土 炭化米



4.SK07出土 青磁小碗



5.SK07出土 白磁四耳壺



6.SK07出土 陶器四耳壺



## 序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、ホテル建設に伴い、平成31年1月から4月にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第224次調査の成果を報告するものです。遺跡のある博多は中世において対外交渉の一大拠点として大きな役割を果たしました。今回の報告はその交易活動に関わる場とみられる区域の調査で、調査成果は、対外交渉史を解明する上での一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、株式会社リファレンスをはじめ、関係者の方々からご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころからの感謝の意を表する次第です。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

## 例　言

- 1 本書は福岡市教育委員会がホテル建設に伴い、福岡市博多区冷泉町450番、451番（地番）で発掘調査を実施した博多遺跡群第224次調査の報告である。
- 2 本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調査期間
1835	HKT-224	175m <sup>2</sup>	175m <sup>2</sup>	2019年1月31日～4月19日
- 3 本書に掲載した遺構の写真撮影は調査担当の佐藤一郎（埋蔵文化財課主任文化財主事）、実測は担当者の他、技能員の藤野雅基が行い、製図は資料整理補助職員の鳥井幸代が行った。
- 4 遺物の写真撮影は佐藤、実測は佐藤、技能員の池田晃子・棚町陽子・林田憲三・久富美智子、製図は佐藤・池田の他、技能員の野村美樹・鳥井・資料整理補助職員の萩尾朱美・林由紀子が行った。
- 5 遺物の整理は鳥井・資料整理補助職員の甲斐田嘉子が行った。
- 6 金属製品の保存処理・X線写真撮影は埋蔵文化財センター上角智希・藤崎彩乃が行った。
- 7 遺構は2桁の通し番号を用い、種類に応じてSD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）の略号を番号の前につけた。
- 8 本書の中国陶磁器の分類は「陶磁器分類編」『大宰府条坊跡 XV』太宰府市の文化財第49集 2000、陶器の名称については「博多出土貿易陶磁分類表」「博多一高速鉄道関係調査(1)ー」福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集1984による。
- 9 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 10 本書の執筆、編集は佐藤が行った。

## 本文目次

Iはじめに .....	5
1 調査に至る経緯 .....	5
2 調査の組織 .....	5
II 遺跡の位置 .....	5
III 調査の記録	
1 調査の概要 .....	7
2 遺構と遺物	
(1) 遺構 .....	7
(2) 遺物 .....	11
IV 小結 .....	36

## 挿図目次

第1図 博多遺跡群発掘区域図（縮尺1/8000） .....	4
第2図 博多遺跡群第224次調査発掘地（縮尺1/1000） .....	5
第3図 博多遺跡群第224次調査遺構配置図（縮尺1/125） .....	6
第4図 博多遺跡群第224次調査土層（縮尺1/60） .....	8
第5図 井戸実測図（縮尺1/60） .....	9
第6図 土坑実測図（縮尺1/40） .....	10
第7図 井戸・溝出土遺物実測図（縮尺1/3） .....	11
第8図 土坑出土遺物実測図1（縮尺1/3） .....	12
第9図 土坑出土遺物実測図2（縮尺1/3） .....	13
第10図 土坑出土遺物実測図3（縮尺1/3） .....	15
第11図 土坑出土遺物実測図4（縮尺1/3） .....	16
第12図 土坑出土遺物実測図5（縮尺1/3） .....	17
第13図 土坑出土遺物実測図6（縮尺1/3） .....	19
第14図 土坑出土遺物実測図7（縮尺1/3） .....	20
第15図 土坑出土遺物実測図8（縮尺1/3） .....	21
第16図 土坑出土遺物実測図9（縮尺1/3） .....	23
第17図 土坑出土遺物実測図10（縮尺1/3） .....	25
第18図 土坑出土遺物実測図11（縮尺1/3） .....	27
第19図 土坑出土遺物実測図12（縮尺1/3） .....	28
第20図 土坑出土遺物実測図13・包含層出土遺物実測図（縮尺1/3） .....	29
第21図 金属製品他実測図（縮尺1/2-1/4） .....	30
第22図 瓦実測図1（縮尺1/4） .....	32
第23図 瓦実測図2・鋳造関係遺物実測図（縮尺1/4） .....	33
第24図 石製品実測図（縮尺1/3） .....	34

## 表 目 次

第1表 銅銭一覧表 ..... 30

## 図 版 目 次

- 図版 1 1. 博多遺跡群第224次I層上面南（北東から）  
2.SK07b土坑遺物出土状況（西から）  
3.SK05土坑（南東から）  
4.SK02土坑貝殻出土状況（北西から）  
5.SK07土坑（北西から）  
6.SK32土坑土層（北西から）  
図版 2 1.SE14井戸・SD20溝（北東から）  
2.SE14井戸（北東から）  
3. SE14井戸・SD20溝掘下げ（北東から）  
4.SK21土坑土層（南から）  
5.SK21土坑（南西から）  
6. SK32土坑（西から）  
7. 博多遺跡群第224次I層上面北（北東から）  
8.SK46土坑遺物出土状況（南東から）  
図版 3 1.SE44井戸（北西から）  
2.SD04溝（北西から）



第1図 博多遺跡群発掘区域図（縮尺1/8000）

## I はじめに

### 1 調査に至る経緯

2018（平成30）年8月2日、株式会社リファレンスから本市に対して博多区冷泉町450番、451番（地番）におけるホテル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書（30-2-422）が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの博多遺跡群の中央や北寄りに位置する。埋蔵文化財課がこれを受け、同年8月30日に確認調査を行い、現地表より15～17m以下の深さで遺構を確認した。申請者と文化財保護に関する協議をもったが、申請面積338.44m<sup>2</sup>の内工事による影響が及ぶ175m<sup>2</sup>を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うことになった。調査は翌2019（平成30）年2月1日から4月19日まで行われた。令和3年度に整理・報告することとした。

### 2 調査の組織

発掘調査委託 株式会社リファレンス

発掘調査受託 福岡市

発掘調査（平成30・令和元年度）

資料整理（令和2・3年度）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課 福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

課長 大庭 康時 菅波 正人

調査第1係長 吉武 学 本田浩二郎

事前審査担当 池田 衍司（主任文化財主事） 森本 幹彦（主任文化財主事）

中尾 衍太（文化財主事） 山本晃平（文化財主事）

発掘調査 佐藤 一郎（主任文化財主事） 資料整理 佐藤 一郎（文化財主事／再任用）

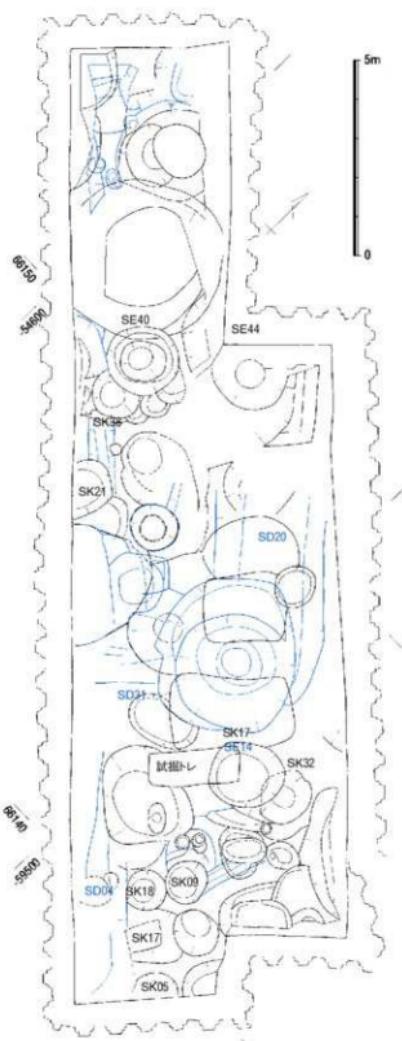
調査・整理の庶務は文化財活用部文化財活用課管理調整係の松原加奈枝（平成30～令和2年度）、井手瑞江・内藤愛（令和3年度）が行った。また、設計の株式会社マサキ設計事務所、準備工の株式会社サンコービルド、施工の成和建設株式会社、地元冷泉町内の方々のご協力により、博多遺跡群第224次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表する。

## II 遺跡の位置

博多遺跡群は福岡平野の中央、那珂川河口部右岸に位置し、博多湾岸沿いに形成された古砂丘上に立地する。調査地は古砂丘中央の北に位置し、地山標高は2m前後の、砂丘の裾部、開析部にあたる。



第2回 博多遺跡群第224次調査発掘地（縮尺1/1000）



第3図 博多遺跡群第224次調査造構配置図（縮尺1/125）

### III 調査の記録

#### 1 調査の概要

9m × 25m の長方形の調査区は建設工事に先行してシートパイルで周囲に土留工事が施されている。調査区の長軸は周辺の地割と同じ真北から約45° 西に振れている。

駐車場営業終了後、遺構が確認された現地表から -1.5mまで鏝取り、遺構検出に当った。土砂はダンプトラックで外部に搬出し、調査の途中にも1回、掘下げで生じた残土の外部搬出を行う。

残存していた遺物包含層（I層暗褐色砂質土～暗灰色砂、II層黄褐色砂 - 標高3.0m前後）上面で検出した遺構は溝、井戸、土坑で、中世前半（12～14世紀）の遺構が主である。下面では古代にさかのぼる遺構を検出した。本調査区は古砂丘の下位に位置し、周辺の調査状況や廃棄物処理坑が多く検出されていることから、居住域からは外れていたと推測される。

#### 2 遺構と遺物

##### 検出遺構

###### 井戸（第5図）

SE14 調査区中央のやや南東 I 層下面で検出した。掘り方の平面形は径3.5～4.0mの不整円形を呈し、深さ2.0mを測る。基底部中央に径0.75m、深さ0.55mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高1.1mを測る。

SE40 調査区中央のやや北西 I 層下面で検出した。掘り方の平面形は径1.8mの円形を呈し、深さ2.4mを測る。基底部中央に径0.55m、深さ0.35mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高1.2mを測る。SK38を切る。

SE44 調査区中央のやや北 I 層下面で検出した。遺構の北西は壁面にかかり、未検出である。掘り方の平面形は径4.0m前後の不整円形を呈し、深さ2.4mを測る。基底部中央に径0.75m、深さ0.75mの桶側の痕跡がみられた。底面の標高1.1mを測る。

###### 土坑（第6図）

SK07 調査区南 I 層下面で検出した。1.7m × 2.0mの不整楕円形を呈し、深さ0.8mを測る。遺構の北西に試掘トレンチがかかる。

SK17 調査区南 I 層下面で検出した。遺構の北東がSK01に切られる。幅1.4m、残存長1.8mの不整形を呈し、深さ0.7mを測る。

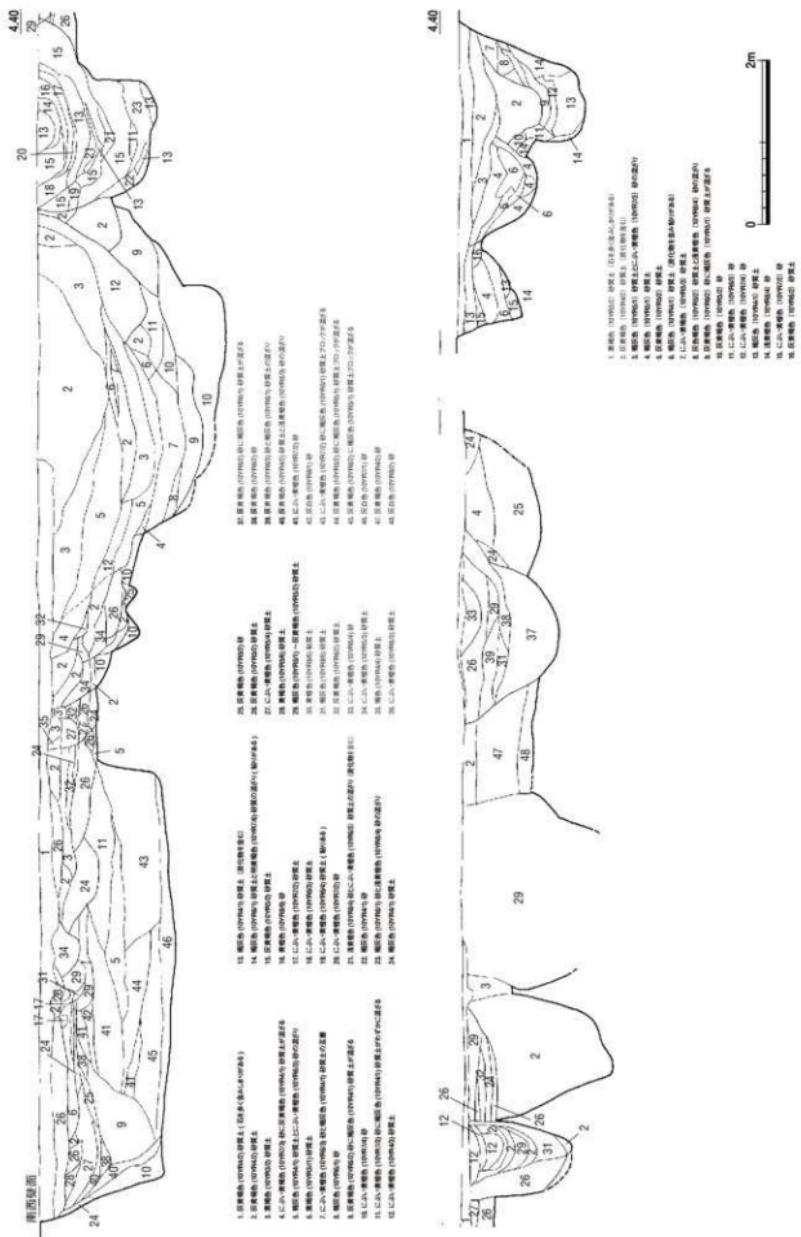
SK32 調査区南 I 層上面で検出した。遺構の北東がSK07に切られる。径1.5m前後の不整円形を呈し、深さ1.6mを測る。

SK09 調査区南 I 層上面で検出した。遺構の南西がSK18に接する。径1.1m前後の不整円形を呈し、深さ1.5mを測る。

SK18 調査区南 I 層上面で検出した。遺構の北東がSK09に接し、南東はSK17を切る。径1.2m前後の不整円形を呈し、深さ1.25mを測る。

###### SK21 調査区中央のやや北西 I 層下面で検出した。一辺1.5mの隅丸方形を呈し、深さ0.85mを測る。

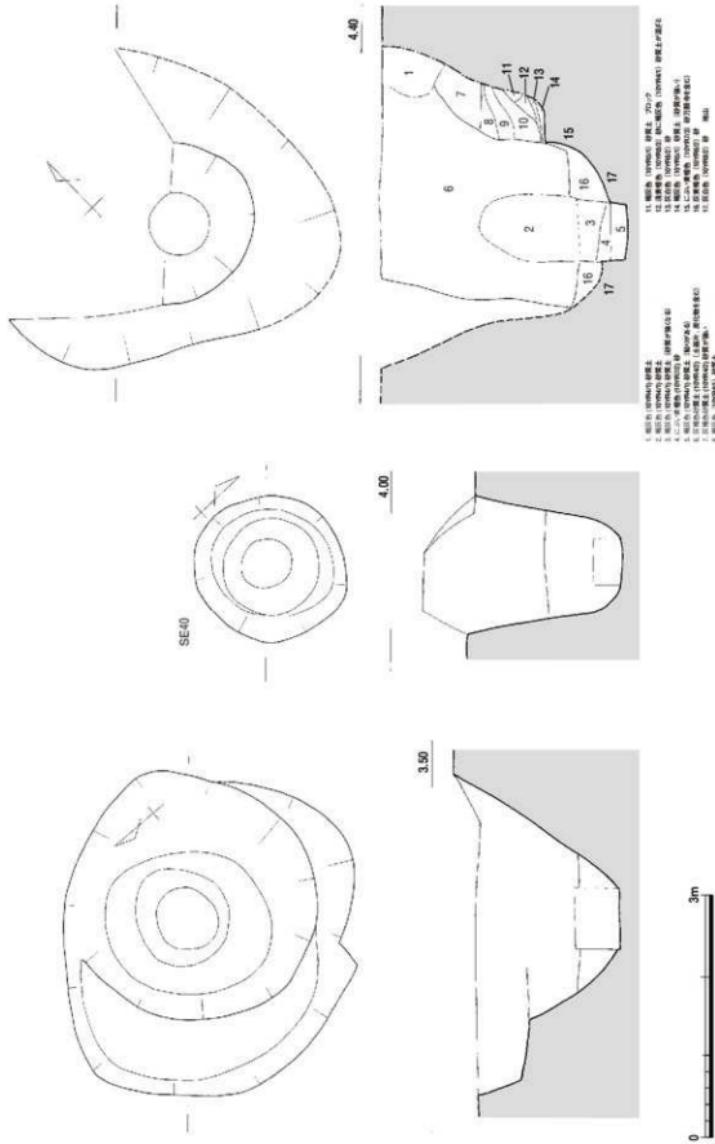
SK38 調査区中央のやや北西 I 層下面で検出した。北側はSE40に切られる。径1.3mの円形を呈し、深さ1.1mを測る。



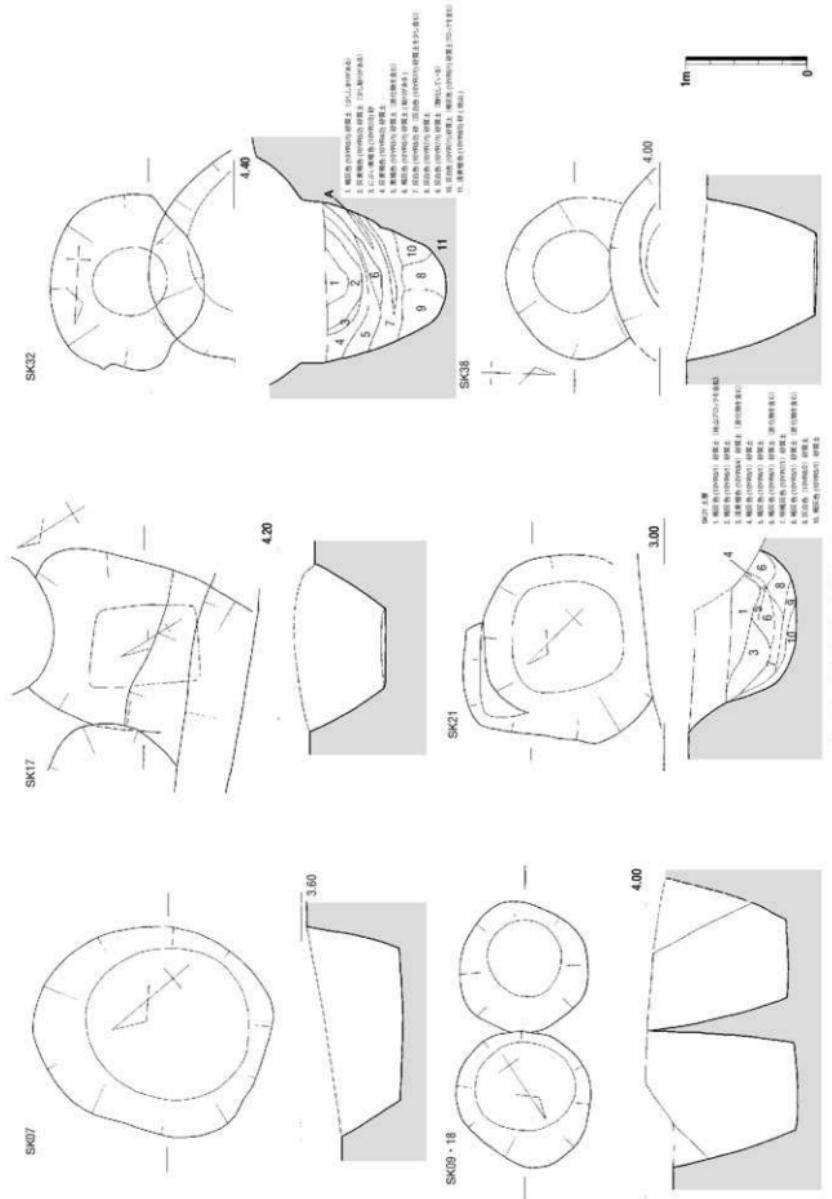
第4圖 博多道跡群第224次調查土層 (縮尺1/60)

SE14

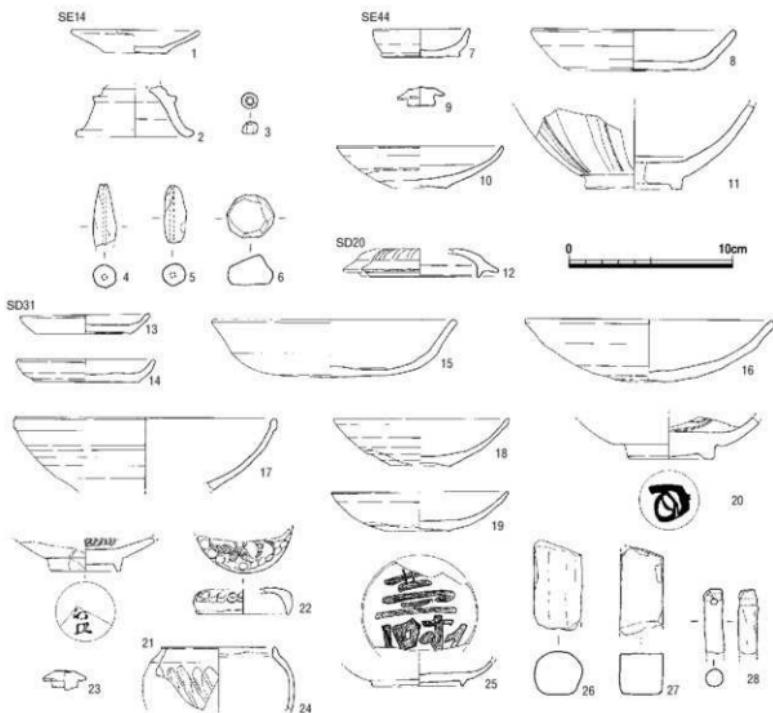
SE4



第5図 井戸実測図 (縮尺1/60)



第6圖 土坑實測圖 (縮尺1/40)



第7図 井戸・溝出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

(第3図)

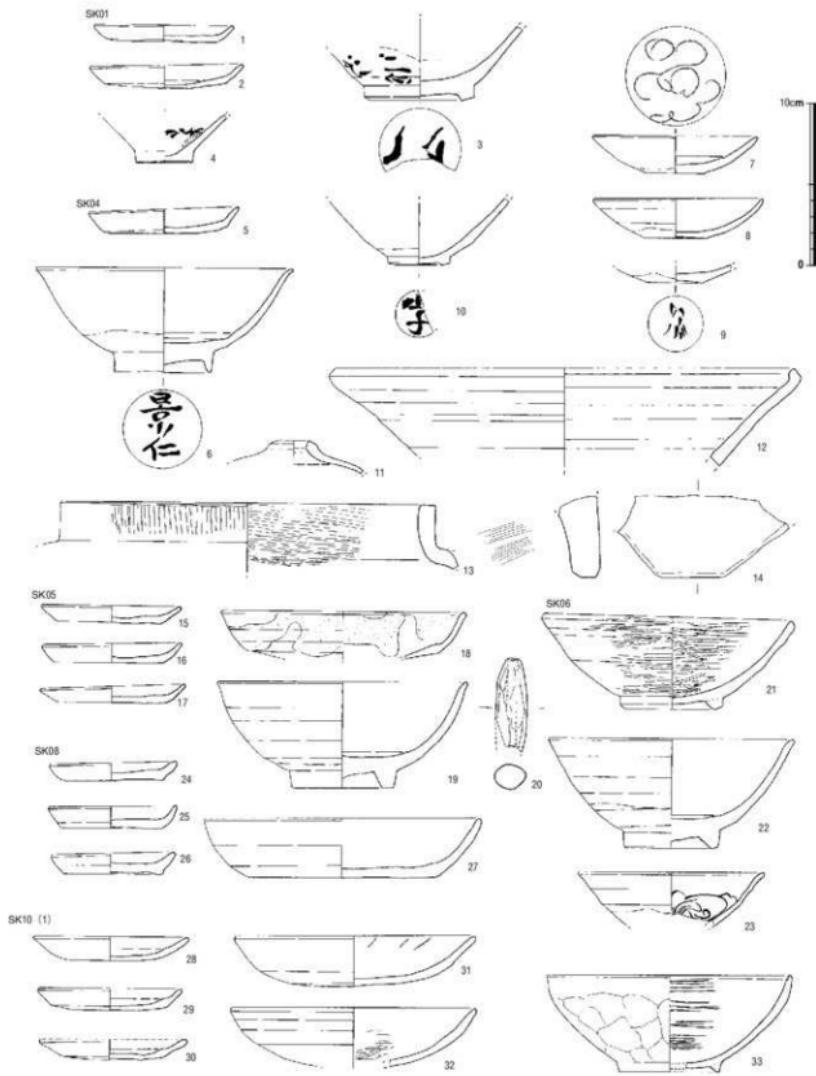
**SD20・31 調査区中央でSE14井戸・SK21土坑と重複して検出した大溝の屈曲部を検出した。**屈曲部から北東に延びるSD20と南東方向に延びるSD31とに二分した。SD20は幅2.7m、深さ1.8mを測り、屈曲部から南北の壁面まで延長6m検出した。SD31は幅2.9m、深さ0.5mを測り、北西のSE44まで延長6m検出した。方位はN45°Wに取る。

**SD04 調査区南端で検出、完掘の結果、溝東岸部分と判明、延長5.6m検出したが、幅・深さは不明。**  
出土遺物

#### SE14 出土遺物 (第7図)

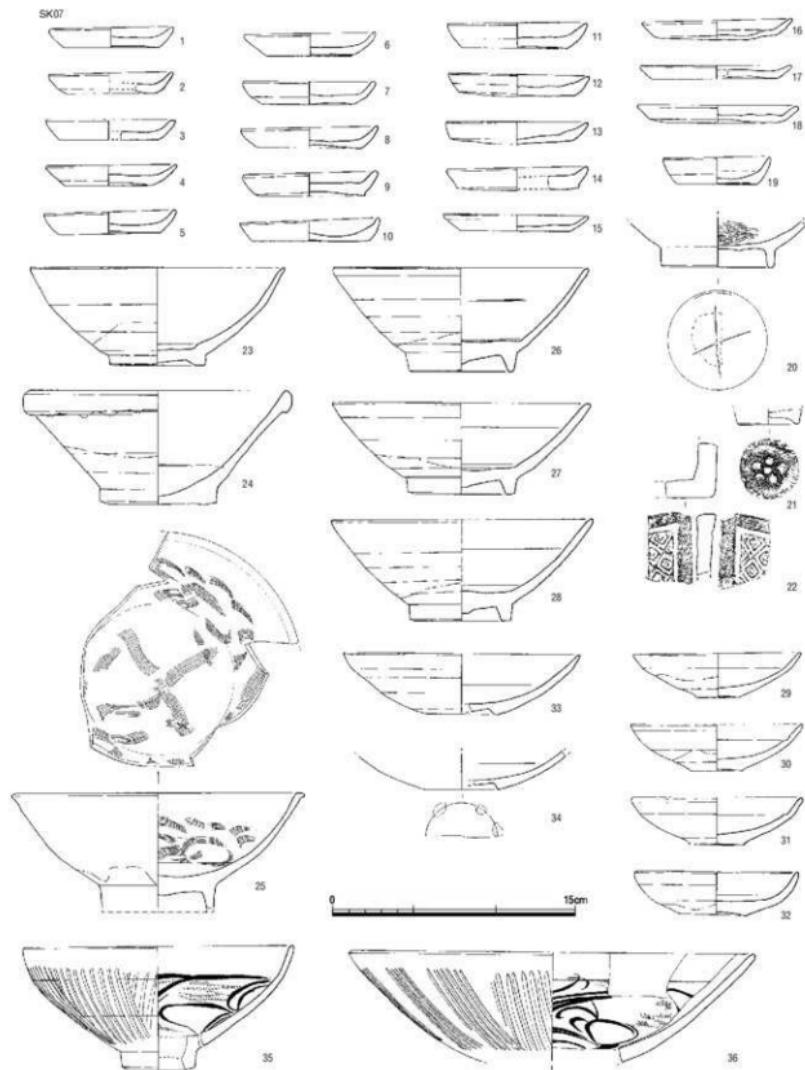
**土師器 小皿 (1)** 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径7.8cm・器高1.4cm・底径1.4cmを測り、口径に対する底径の割合が小さい。白磁 燭台 (2) 基部が残存する。ガラス小玉 (3) 径1.0cm、高さ0.7cmを測り、暗青灰色を呈する。土鍤 (4・5) 残存長3.9・3.5cm、最大径1.4cmの管状土鍤。瓦玉 (6) 平瓦を再加工したもので、径2.5cm、厚さ1.8cmを測る。

**SE44 出土遺物 (第7図)** 土師器 底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。特小皿 (7) 口径5.9cm・器高1.7cm、杯 (8) 口径12.6cm、器高2.5cmを測る。白磁 小壺蓋 (9)



第8図 土坑出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)

白磁皿(10) 体部内面下位に段が付く。青磁碗(11) 体部外面に鎬蓮弁を削り出し、口縁部を欠失する。底部の厚さが1.2cmと薄く、高台幅は0.7cmだが、体部最大厚0.7cmと薄手である。龍泉窯系III類とII類の間に位置するものである。



第9図 土坑出土遺物実測図2（縮尺1/3）

SD20 出土遺物（第7図）

青白磁 小壺蓋（12）身受けの返りを持ち、天井部外面に花弁を入れる。

### SD31 出土遺物（第7図）

土師器 底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（13-14）口径7.9-8.5cm・器高1.2-1.4cm、杯（15）口径15.1cm、器高3.6cm、丸底杯（16）口径15.4cm、器高3.8cmを測る。白磁 碗（17）小さな玉縁状口線のII-1で、底部は欠失している。皿（18-19）体部内面中位から下位に段が付くVI-1aで、内湾する体部から口縁部が直線的に延びる。青磁 碗（20）龍泉窯系無文割花碗の底部面で、外底に墨書が記されている。青白磁 碗（21）底部片で、外底高台内の削り出しあは浅く、墨書を記す。合子蓋（22）体部外面に型造りにより花卉文を施す。蓋（23）小壺の栓状蓋。小壺（24）口縁端部を僅かに上方につまみ出す。体部外面は花弁を削り出す。底部を欠失する。青花 皿（25）上面での混入で、内底に「壽」と記す。

土製品（26-27）26が断面不整円形、27は正方形の柱状土製品である。土錐（28）径1.1cmの円柱状土錐で、一端が欠失し、残存する一端に長軸と直交する孔を穿つ。

### SK01 出土遺物（第8図）

土師器 小皿（1・2）底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径8.6～9.4cm、器高1.0～1.4cmを測る。白磁 碗（3）高台内の削り出しがやや深いIV-2で、体部外面下位と外底の露胎部分に墨書を記す。青白磁 碗（4）外底の削り出しが僅かで、極めて幅が狭い高台が付く底部片である。口縁部から体部中位にかけて欠失し、内面にはヘラと櫛状工具による文様を施す。

### SD04 出土遺物（第8図）

土師器 小皿（5）底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径9.2cm、器高1.5cmを測る。白磁 碗（6）口縁部が外反するV-2aで、外底に墨書「景仁」を記す。皿（7～9）8・9は体部内面中位から下位に段が付くVI-1bで、内湾する体部から口縁部が直線的に延びる。9は口縁部を欠失し、外底に墨書を記す。7は内面に簡略化した花文をヘラ描きするVI-2bである。黒釉陶器 碗（10）口縁部を欠失し、体部は直線的に延びる。外底に墨書「□子」を記す。陶器 小口瓶（11）肩部より上の破片で、口縁部は内上方に短く延び、端部を上方につまみ出す。須恵器 こね鉢（12）直線的に延びる口縁部から体部中位にかけての破片で、口縁端部を上方に拡張する。瓦質土器 火鉢（13-14）口縁部と脚部片で、同一個体とみられる。

SK05 出土遺物（第8図）土器、陶磁器の他、アワビなど貝殻が出土したが、チョーク化が著しい。土師器 底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（15～17）口径8.6～9.0cm、器高1.0～1.2cm、杯（18）口径14.9cm、器高2.9cmを測る。器表には煤が付着している。白磁 碗（19）口縁部が外反するV-2a、土錐（20）残存長5.7cm、最大径1.5cmの管状土錐である。

### SK06 出土遺物（第8図）

瓦器 碗（21）外底部を除き内外面とも密にヘラ磨きされる。白磁 碗（22）口縁部が外反するV-2a、青磁 小碗（23）内面に花文をヘラ描きする連江窯系青磁、底部を欠失する。

SK07 出土遺物（第9～15図）出土陶磁器のほとんどが二次被熱により器面がただれています。陶器四耳壺66内部からは炭化米30g、木炭105gを検出した。図示した他、コンテナ30箱の遺物片が出土。

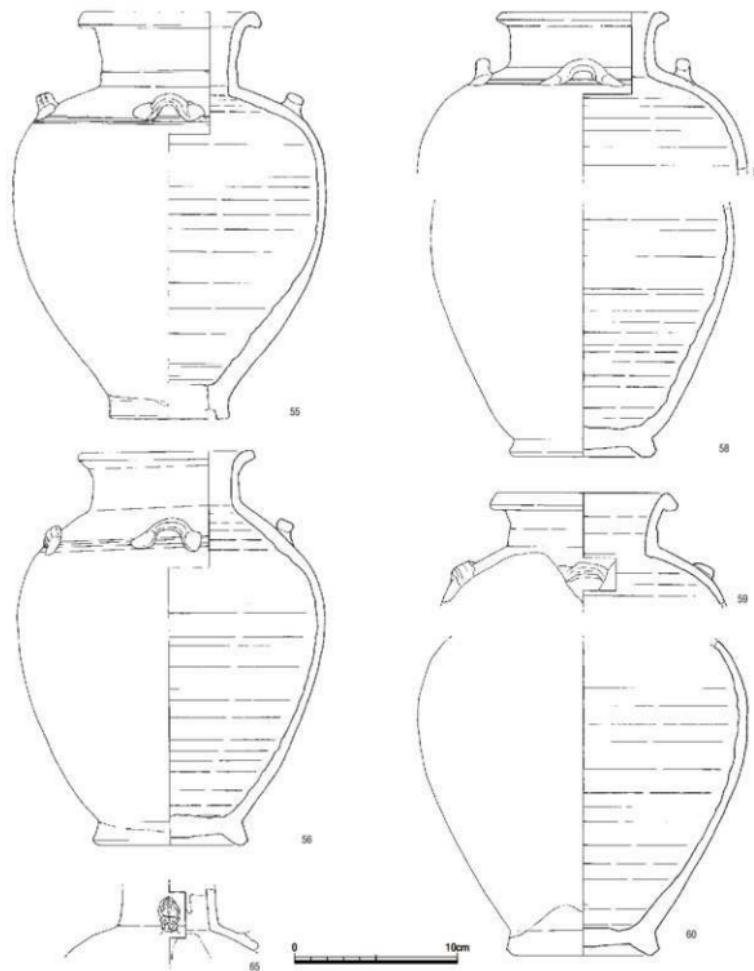
土師器 底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径8cm前後の群（1～18）と10cm前後の群（16～18）とに大別され、前者は上面から出土。特小皿（19）口径cm、器高cmを測る。口径8cm前後の小皿の一群に伴う。上面からの出土。21は高台付器種不明の底部片で、外底に五星文を印刻する。

内黒土器 梶（20）口縁部を欠失する。高台は直に立つ。外底にヘラ書きで記号を記す。瓦質土器 火鉢（22）方形火鉢の角の口縁部片で、外面に三升文を印刻する。白磁 碗（23～28）23は釉下に化粧



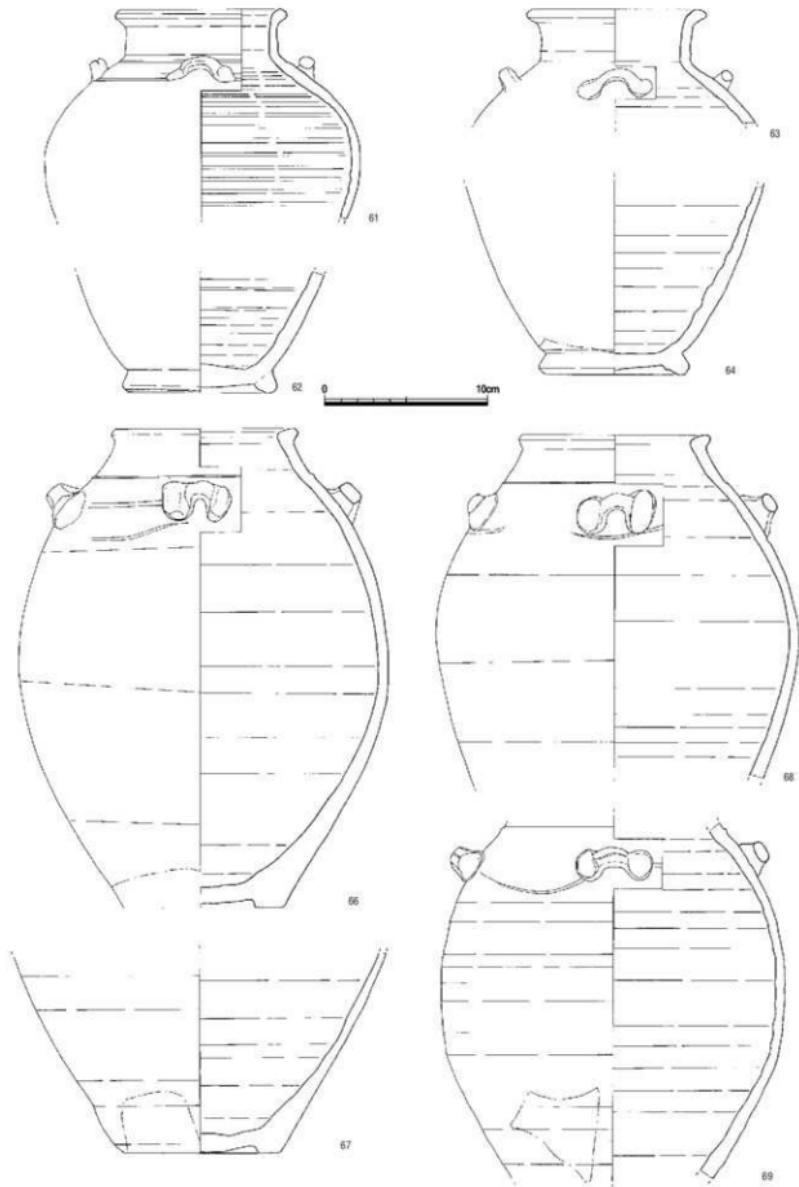
第10図 土坑出土遺物実測図3 (縮尺 1/3)

土を塗布し、内底見込みに段が付き、内面無文のⅡ-4 b<sub>1</sub>、24は口縁部を玉縁状にし、高台を幅広に浅く削り出し、内面の体部と底部の境に沈線をめぐらすⅣ-1 a、25は口縁端部を嘴状にし、内面に櫛状工具で施文するV-4 b、26~28は内底見込みの軸を輪状に搔き取り、体部から口縁部まで直線的に延びるⅦ-2、Ⅲ(29~32) 29~31は体部上位で屈曲し、その内面に段が付くVI-1 a、32は体部中位で緩く屈曲し、その内面に段が付くVI-1 bである。高麗青磁 Ⅲ(33~34) 外底を浅く削り出し基筒底



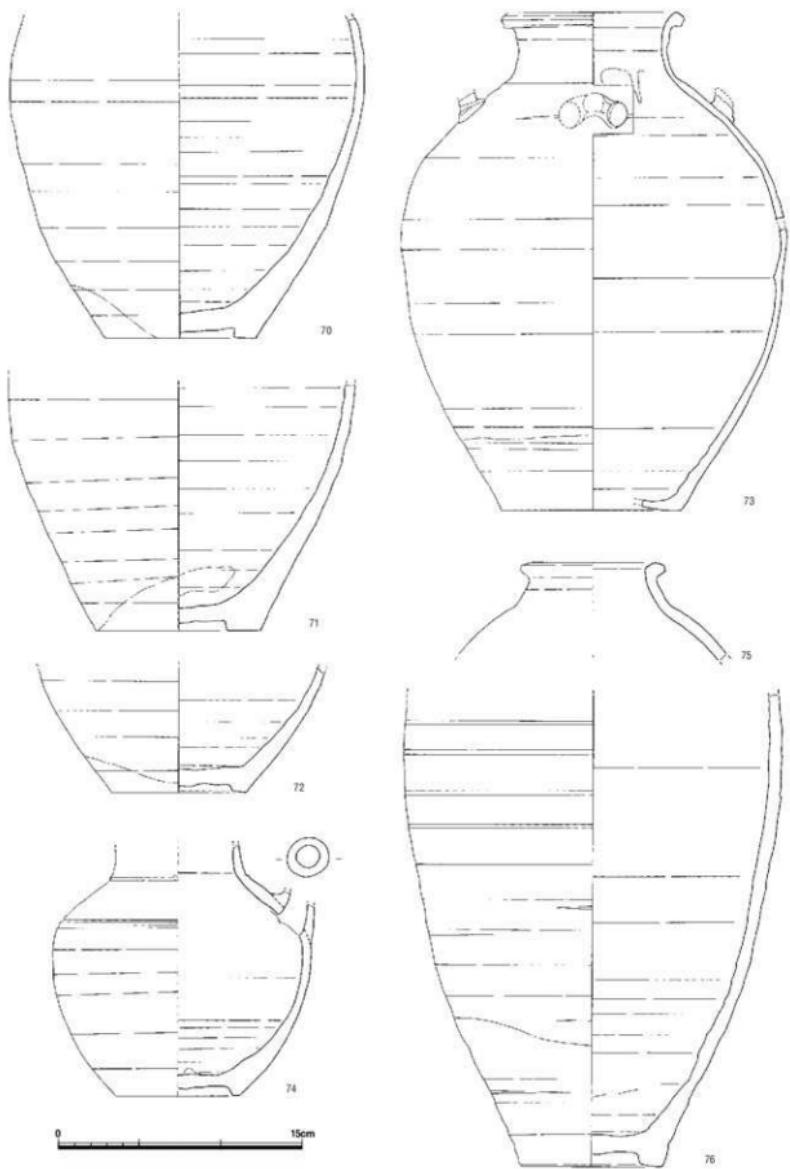
第11図 土坑出土遺物実測図4 (縮尺 1/3)

とし、端部に目跡が付着する。内湾する体部から直線的に口縁部が延びる。体部内面中位に沈線をめぐらす。34は口縁部を欠失する。33は焼成不良で、灰褐色の胎土に灰色の釉を全面に掛ける。34は褐色の底部に暗オリーブ色の釉を掛ける。小碗（44）内湾する体部から直口縁が延びる。断面逆台形の輪状高台は鋭さを欠く。体部外面に宝相華を毛彫りし、内面全体には櫛目文を入れる。碗IV類を小型化した形状を取るが、内底見込みに段は付かない。小型化した際よくみられるように祖型の碗の特



第12図 土坑出土遺物実測図 5 (縮尺 1/3)

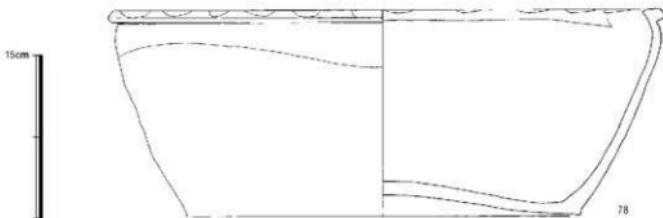
微を一部省略している。オリーブ灰色の緻密な胎土に、オリーブ灰色の釉を全面に掛けける。高台に目跡が付着している。青磁 碗（35・42・43）35は体部外面にヘラで条線を入れ、内面にはヘラ描き文と櫛状工具による刺突文を施す。高台は内側を欠失するが、削り出しは浅い。42・43は外面無文である。鉢（36）丸みをもつて体部から口縁部まで外上方に延びる。底部を欠失し、体部外面にヘラで条線を入れ、内面にはヘラと櫛による文様を施す。小碗（37～39）体部外面に花弁の外形をヘラ描きし、その間に櫛目を入れ、花弁の脈を表現する。内面はヘラ描きした花弁の外形と中軸の間を櫛目で埋める。碗全体を花と見なし、内外面とも一体とした施文となす。高台付皿（40・41）碗と同様に内面にヘラと櫛状工具を用いて花弁を表すが、外面は無文である。皿（45～47）体部中位で屈曲し、口縁部が直に延びる。45は内底見込みにヘラ、46・47はヘラと櫛状工具を用いて花文を施す。青白磁 高台付皿（48～50）いずれも外底の削り出しが僅かで、極めて幅が狭い高台が付く。48は体部から口縁部まで丸みを持って立ち上がり、口縁端部は薄く収められる。体部内面から見込みまでヘラと櫛状工具を用いて花文を施す。49は体部中位の屈曲部から口縁部が外反し、端部は薄く収められる。内底見込みにヘラと櫛状工具による花文を施す。50は体部中位で屈曲し、口縁部を欠失する。内底見込みにヘラと櫛状工具による花文を施す。水滴（51）天井部中心と体部下半を欠失する。体部外面に連子文を型押して入れる。小壺 蓋（52～54）身受けの返りを持ち、54は天井部外面に花弁を入れる。白磁 四耳壺（55～64）肩部は倒卵形を呈し、55～57・61はなだらかな肩部に凹線をめぐらせ横向きの四耳を貼り付ける。55～57・61・63の口縁部は丸く、59の口縁部はやや鋭角に折り曲げられている。55はほぼ直立する角高台で、端部外面の面取りは僅かで、56・58・60・62・64は外に開く角高台で、58は端部外面をわずかに面取りし、56・60の面取りはやや広くなる。62・64の端部は鋭さを欠く。水注（65）頭部付け根から肩部にかけての破片で、頭部と肩部の境に装飾が付いた耳、肩部には把手（基部のみ残存）を貼付する。陶器 四耳壺（66～73）66～72は樽形を呈する陶器壺で、胎土には細かい砂粒を多量に含み、褐灰色～灰色を呈する。灰オリーブ色～褐色の釉を内面全体から底部付近まで掛けれる。66・68・69は外面の頸部と脇部の境には段が付き、その直下に横向きの四耳を貼り付け、その間に波状凹線をめぐらす。66・70～72は口縁部～体部上半、68は底部、69は口縁部と底部を欠失する。66・68・69の頸部は内傾し直線的に延びる。66・68の口縁部は外に三角につまみ出される。66・67・70～72は基筒底状の輪状高台に削り出す。73は頸部が直立し、肩部と体部の境には段が付く。口縁端部を丸く折り曲げ、水平に引き出す。肩部上位には凹線をめぐらせ、横耳を貼付する。底部は平底で、にぶい黄橙色の胎土に暗褐色の釉を頸部内面から体部外面下位まで掛けれる。水注（74）口縁部、注口先端、把手を欠失する。頸部と肩部の境に極細の断面V字突帯、肩部と体部の境には2条の凹線をめぐらせ、高台は基筒底状の輪状に削り出す。胎土には細かい砂粒を含み、明赤褐色を呈する。オリーブ褐色の釉を全面に掛けれる。長瓶（75・76）口縁から肩にかけての75と体部中位以下の76は接合しないが、胎土、釉、肉厚を同じくし同一個体とみられる。胎土には細かい白色砂粒を多量に含み、黄灰色を呈する。灰オリーブ色の釉を全面に掛けれる。75の頸部は内傾し直線的に延び、口縁部は外に折り曲げられる。76の体部中位には1.5～2.0cmの間隔を取って凹線をめぐらす。盤（77～80）77は鈞状の口縁部で、底部は周縁部のみ残存し、内面には鉄絵が施されている。浅黄色の釉を内面と口縁部外面に掛け、釉下に化粧土掛けする。口縁部上面は釉を拭き取り、目跡が付着する。胎土には1mm未満の砂粒、黒色微粒子を含み、灰白色～にぶい黄橙色を呈する。78～80は幅狭な断面し字形口縁で、器高が高く、内面全体と口縁部下外面まで浅黄色・オリーブ黄色・黄褐色の釉を掛け、釉下に化粧土掛けを施す。口縁部上面は釉を拭き取り、目跡が付着する。胎土には1mm未満の白色砂粒、黒色微粒子を含み、灰色・緑灰色・にぶい黄橙色を呈する。80は大型品である。こね鉢（81～83）口縁端部を内下方に拡張し、口縁下内面



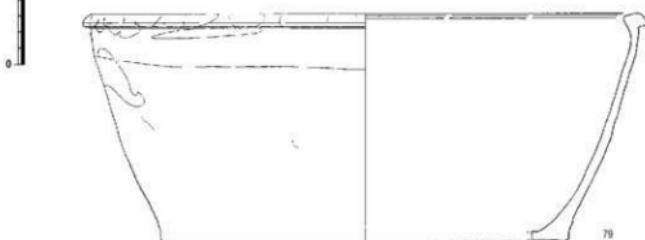
第13図 土坑出土遺物実測図 6 (縮尺 1/3)



77



78

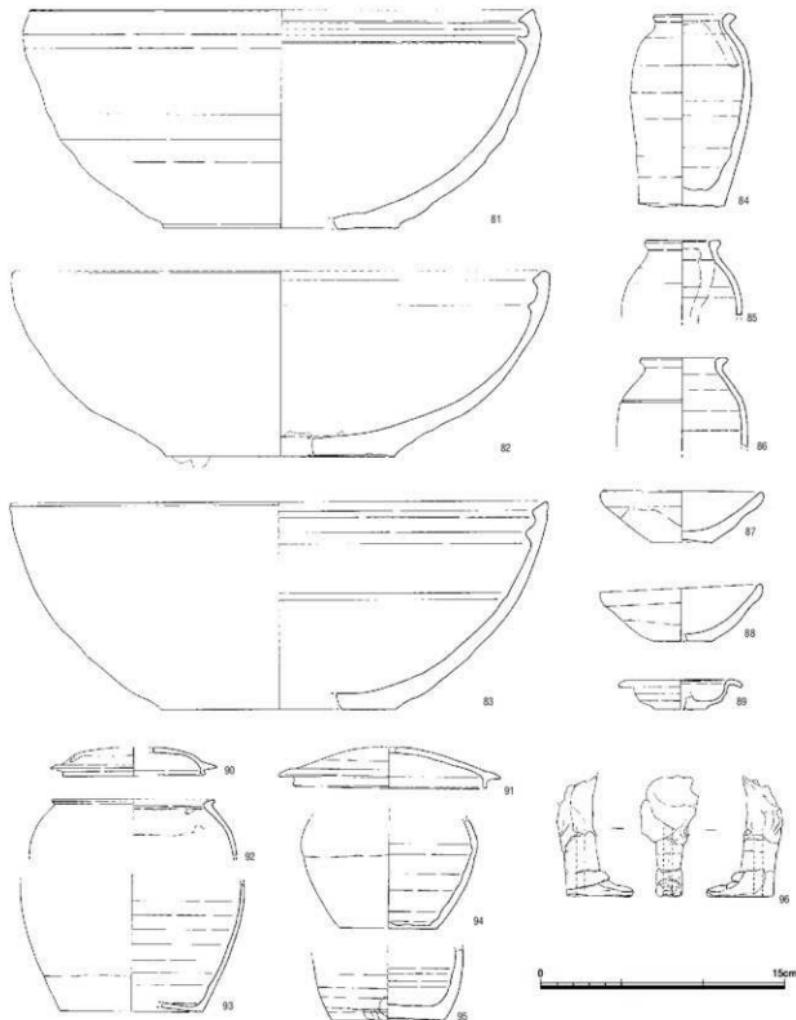


79



80

第14図 土坑出土遺物実測図 7 (縮尺 1/3)



第15図 土坑出土遺物実測図 8 (縮尺 1/3)

に断面V字の隆帯をめぐらす。無釉の焼締め陶で、胎土には細かい白色砂粒を多量に含み、にぶい赤褐色～褐灰色を呈する。長瓶（小）(84～86) 長瓶を小型化したもので、85・86は体部下半以下を欠失する。口縁部が「く」の字形に短く外反し、84の底部はヘラ削りされる。皿（87・88）玉縁状口縁の

平底皿で、精良な灰褐色の胎土に灰オリーブ色～灰白色の釉を掛ける。蓋（89～91）89は中央がくぼむ掏い蓋で、つまみを欠失している。胎土は精良で、灰黄色を呈する。黒褐色の釉が上面に掛かる。90・91は身受けの返りを持ち、天井部中心を欠失する。90は壺92・93と胎土と釉を同じくし、92の身受けの返りは蓋受けに丁度収まる。胎土には細かい砂粒を少量含み、褐灰色を呈する。天井部外面に黒褐色の釉が掛かる。壺（92～94）上半部片92と下半部片93は接合しないが、胎土、釉、肉厚を同じくし同一個体とみられる。胎土には細かい砂粒を少量含み、灰～褐灰色を呈する。92は暗灰色～暗灰黄色の釉が口縁部内面から体部外面、93は黒色の釉が内面と体部外面下位まで掛けられている。白磁（95）平底の底部片で、器種は不明である。陶製人物像（96）素焼きの磨堀樂の靴を履く下腿の破片で、SK10出土の破片と同一個体である。胎土はきめが細かく、堅緻に焼成される。自立するために、かかとから径5mmの棒挿入孔を穿つ。他に部位不明の破片が7点出土している。

#### SK08 出土遺物（第8図）土器の他、銅製品・鑄造関係遺物が出土した。

土師器 底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（24～26）口径7.7～7.8cm、器高1.0～1.4cm、杯（27）口径17.0cm、器高3.7cmを測る。

#### SK10 出土遺物（第8・16図）

土師器 底部はヘラ切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（28～30）口径8.9～9.6cm、器高1.3～1.5cmを測る。丸底杯（31・32）口径14.8・15.1cm、器高3.1・3.6cmを測る。瓦器 梗（33）楕葉型瓦器梗で、内面は口縁端部に沈線をめぐらせ、口縁部以下は細かいヘラ磨き、外面は口縁部が横ナデ、体部には指頭圧痕が残る。白磁 瓢（34～40）34・35は口縁部を玉縁状にし、高台を幅広に浅く削り出すIV類で、34は内面の体部と底部の境に沈線ではなく、35は内面の体部と底部の境に沈線がめぐるIV-1aである。36～38は口縁部が僅かに外反、もしくは直線的に延びるV類で、36は内外面とも無文のV-2a、37・38は体部外面に放射状にヘラによる文様を入れるV-2b、39は口縁端部が嘴状を呈し、内面に櫛状工具で施文するV-4bで、外底に墨書「西郡」を記す。40は高台付浅碗で、内面に櫛状工具で施文するVI-1bである。皿（41～43）41は玉縁状口縁に削り出しが浅い高台のII-1b、42はやや外反する口縁に削り出しが深い高台のII-1a、43は丸みを持つ体部下位からやや外反する口縁が延びるV-1aで、内面下位に段が付く。小碗（44）口縁部が外反する碗V類と器形をほぼ同じくする。底部を欠失し、体部外面に放射状にヘラ書き文を入れる。青磁 瓢（45）龍泉窯系無文劃花碗I-1aで、外底に墨書を記す。陶器 小盤（46）内溝気味に直立する体部から口縁部が断面L字に折れる。底部を欠失する。陶製人物像（47）素焼きの磨堀樂の肩と下腿の破片で、SK07出土の破片と同一個体である。胎土はきめが細かく、堅緻に焼成される。

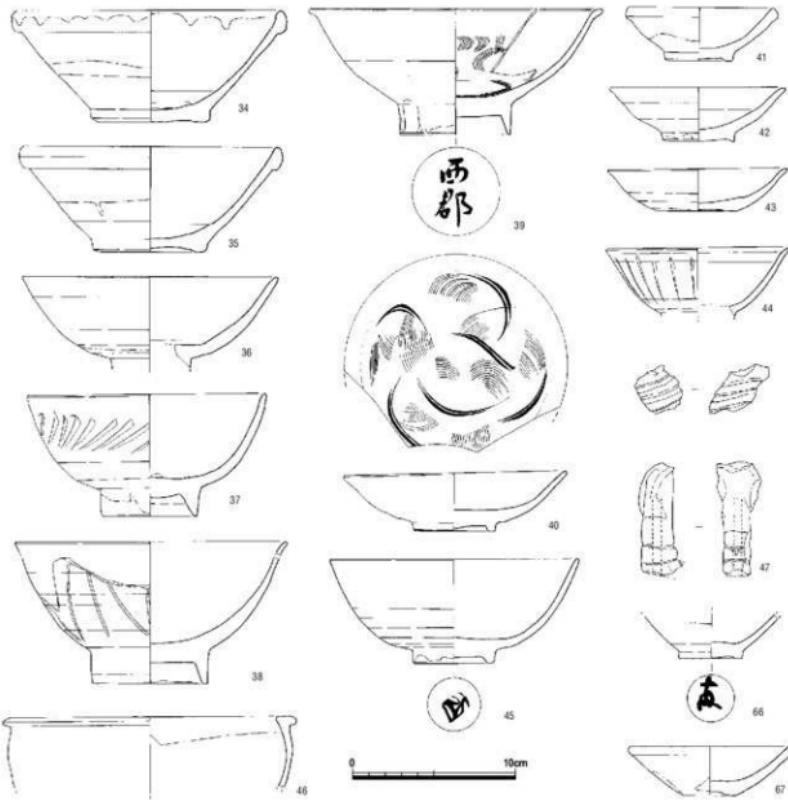
#### SK11 出土遺物（第16図）

土師器 底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。特小皿（48）口径7.5cm、器高1.5cmを測る。小皿（49～60）口径8.2～10.0cm、器高1.2～1.9cm、杯（61～64）口径12.5～16.6cm、器高2.5～3.5cmを測る。瓦器 梗（65）体部中位の屈曲部が肥厚し、貼付された高台は剥落している。白磁 小碗（66）高台内の削り出しが浅く、内底は平坦である。口縁部を欠失し、外底に墨書「置？」を記す。陶器 皿（67）口径部が直線的に延び、端部は外傾する。

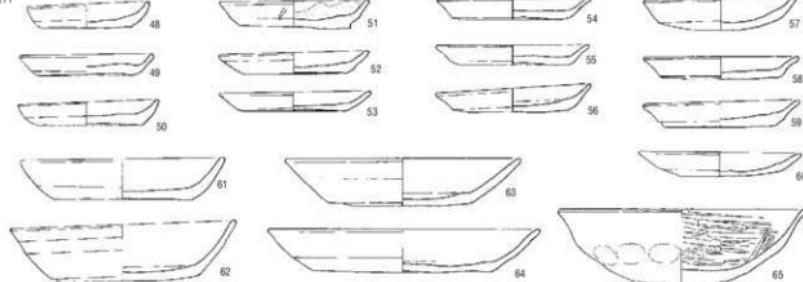
#### SK12 出土遺物（第16・17図）

土師器 小皿（1～5）底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径8.2～10.0cm、器高1.2～1.9cmを測る。白磁 燭台（6）基部が残存する。ヘラと櫛状工具を用いて花弁を表す。土鍤（7）残存長4.6cm、最大径1.7cmを測る管状土鍤である。

SK10 (2)



SK11



第16図 土坑出土遺物実測図 9 (縮尺 1/3)

#### SK13 出土遺物（第17図）

土師器 底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（8・9）口径78.8cm、器高1.2・1.3cm、杯（10）口径11.6cm、器高2.8cmを測る。

#### SK15 出土遺物（第17図）

土師器 小皿（11）底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径9.2cm、器高1.6cmを測る。

#### SK17 出土遺物（第17図）

土師器 底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。特小皿（12）口径7.4cm、器高1.3cm、小皿（13・14）口径9.1・9.6cm、器高1.0・1.5cmを測る。

#### SK21 出土遺物（第17図）

土師器 底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（15～18）口径8.0～9.4cm、器高0.9～1.4cm、杯（19）口径14.6cm、器高3.2cmを測る。白磁 碗（20）高台を幅広に浅く削り出し、内底に沈線がめぐらすIV-1aで、口縁部は欠失している。越州窯系青磁 浅碗（21）内面に五弁花をヘラ描きする浅碗の底部片で、外開きの高台が付く。端部は欠失している。水注（22）下部片で、体部外面にヘラ描きで文様を施す。緑灰色の胎土にオリーブ灰色の釉を掛ける。瓦玉（23・24）径2.0cm、厚さ1.4・1.7cmを測る円盤状土製品である。ガラス製品（25）壺形を呈し、約1/3が残存する。復元径3cm、孔径0.8cm、厚さ0.25cmを測る。外周よりの一端に孔を穿つ。

#### SK22 出土遺物（第17図）

土鍤（26・27）全長3.0・4.0cm、最大径1.1・1.4cmを測る管状土鍤である。瓦玉（28・29）径3.5・3.0cm、厚さ2.1・1.8cmを測る円盤状土製品である。

#### SK25 出土遺物（第17図）

土師器 底部は糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（30）口径9.8cm、器高1.3cm、杯（31・32）口径12.4・14.2cm、器高3.0・3.3cm、丸底杯（33）口径14.4cm、器高3.2cmを測る。

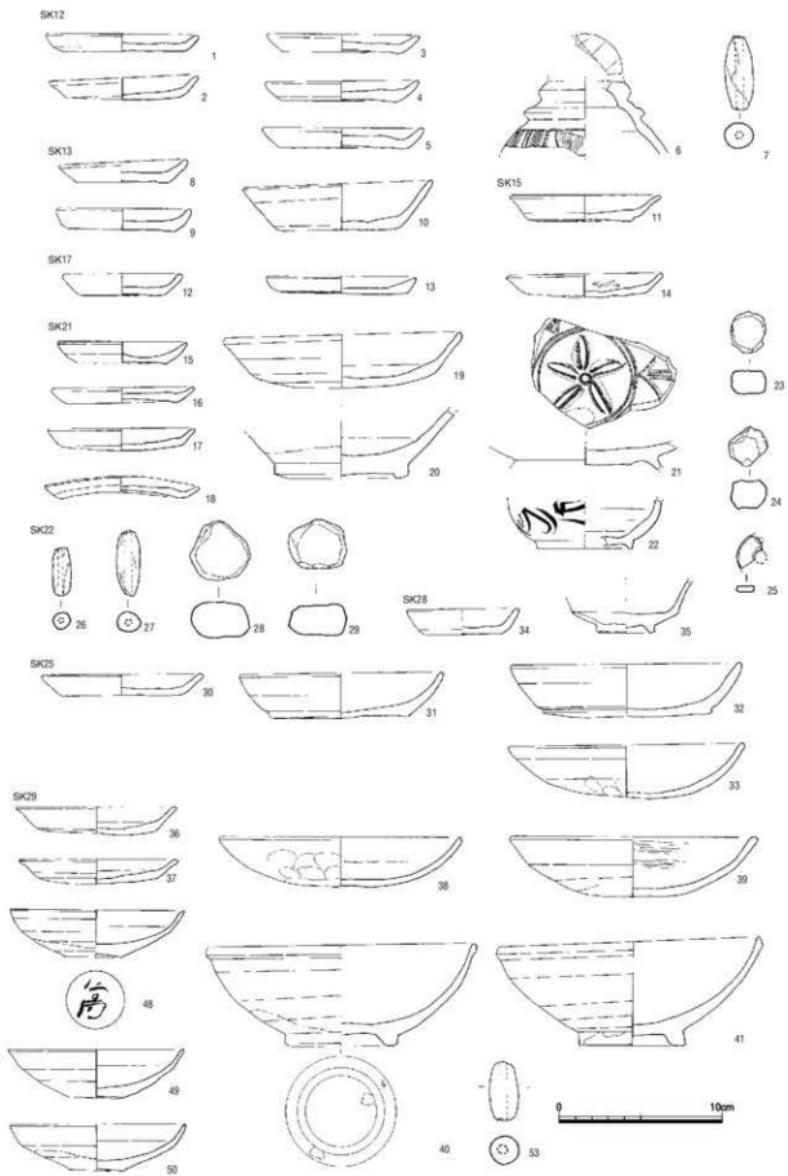
#### SK28 出土遺物（第17図）

土師器 特小皿（34）底部は糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径6.4cm、器高1.4cmを測る。

白磁 杯（35）体部下位で鋭く屈曲し、外反して延びる。口縁部を欠失する。

#### SK29 出土遺物（第17・18図）

土師器 小皿（36・37）底部はヘラ切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径9.8cm、器高1.5・1.6cm、丸底杯（38・39）口径15.0・15.2cm、器高3.0・3.7cmを測る。白磁 碗（40～47）40～44は釉下に化粧土を掛ける。40～42・44は外面を直に、内面を斜めに高台を削り出す。40・41は小さな玉縁状口縁のII-1、42・43は直線的に口縁部が伸び、42～44は内底見込みに段が付く。42は体部内面無文のII-4a、43・44は体部内面を白堀線で分割するII-4b1。45は玉縁状口縁部に、幅広に浅く削り出す高台、内底に沈線をめぐらすIV-1a、46は嘴状の口縁端部に、内面無文のV-4aである。47は外面を直に、内面を斜めに細く高い高台を削り出す。口縁部を欠失する。体部は内湾し、外面は刻線で分割する。外底に墨書「王□」を記す。皿（48～50）体部上位で屈曲し、その内面に段が付くVI-1aで、48の外底には墨書を記す。陶器 こね鉢（51）無釉焼縮めのこね鉢I類で、口縁端部は内傾し、内面の口縁下を強くなり、突帯をめぐらす。内面は使用による磨滅、体部外面はナデを施す。胎土には細かい砂粒を多量に含み、にぶい褐色を呈する。須恵器 皿（52）口縁部は横ナデ、底部内面



第17図 土坑出土遺物実測図10（縮尺 1/3）

はナデ、外面はヘラ切り未調整である。土錐（53）全長3.6cm、最大径1.8cmを測る管状土錐である。

#### SK30 出土遺物（第18図）

土師質土器 鍋（54）内湾する体部が屈曲し口縁部が開くが、屈曲部内面は棱が付かない。

#### SK32 出土遺物（第18・19図）

土師器 底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（55～59）口径8.5～9.0cm、器高0.9～1.4cm、杯（60）口径12.7cm、器高2.6cmを測る。

白磁 碗（61～66）61～63は釉下に化粧土を塗布し、内底見込みに段が付き、内面無文のII-4b、64はIV-1a、65～66は内底見込みの釉を輪剥ぎし、体部から口縁部まで直に延びるV-2、皿（67～69）体部上位で屈曲し、その内面に段が付くVI-1aである。小碗（70）碗V-2を小型化したものだが、高台は低い。青白磁 蓋（71）無頭小壺の栓状蓋である。極小碗（72）口縁部が直立し、高台内の削り出しは浅い。黒釉陶器 小碗（73）底部を欠失し、体部は内湾気味に口縁部まで延びる。青磁 碗（74）体部内面にヘラによる簡略化した花文と櫛状施文具による「之」字方点綴文を入れ、体部外面に櫛状施文具による粗い条線を入れるI-1bである。陶器 壺（75）頸部と胴部の境には段が付き、頸部は内傾し直線的に延びる。口縁部は三角につまみ出される。

#### SK35 出土遺物（第19図）青花 皿（76）口縁部欠失の端反り皿で、内底と体部外面に文様を配す。

#### SK37 出土遺物（第19図）

瓦器 梱（77・78）体部内外面は横方向にヘラ磨きする。白磁 碗（79）口縁端部を嘴状にし、外面にヘラで放射状に刻線を入れ、内面は櫛状工具で施文するV-4cで、外底に墨書「黄□」を記す。皿（80）体部中位で内湾し、内面に段が付くVI-1aである。青白磁 合子蓋（81）型作りで体部外面に花弁を施す合子の蓋で、天井部は欠失している。黒釉陶器 碗（82）倒傘形の碗で、胎土は灰黄色を呈し、黒～暗褐色の釉が体部外面下半まで掛かる。

#### SK38 出土遺物（第19図）

白磁 碗（83）小さな玉縁状口縁のII-1、皿（84）体部の中位で緩く屈曲し、その内面に沈線をめぐらす高台付皿で、口縁端部を輪花にし、それに沿って縱方向の分割線を入れる。

#### SK41 出土遺物（第19図）

白磁 碗（85）小さな玉縁状口縁のII-1、陶器 蓋（86）天井部外面が未調整の他は、横ナデを施す。

#### SK42 出土遺物（第19図）

土師器 小皿（87）底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。口径9.0cm、器高1.2cmを測る。白磁 碗（88～91）丸みを持った体部から直線的もしくはわずかに外反する口縁部が延びるV-1で、91は口縁部を欠失する。皿（92）体部から口縁部まで丸みを持って立ち上がり、口縁端部を水平に引き出すV-2aである。

#### SK45 出土遺物（第20図）

白磁 碗（93）細く低い高台を削り出す浅碗の底部片で、外底に墨書「晋」を記す。

須恵器 杯蓋（94）天井部が扁平で、口縁端部は小さく立つ。

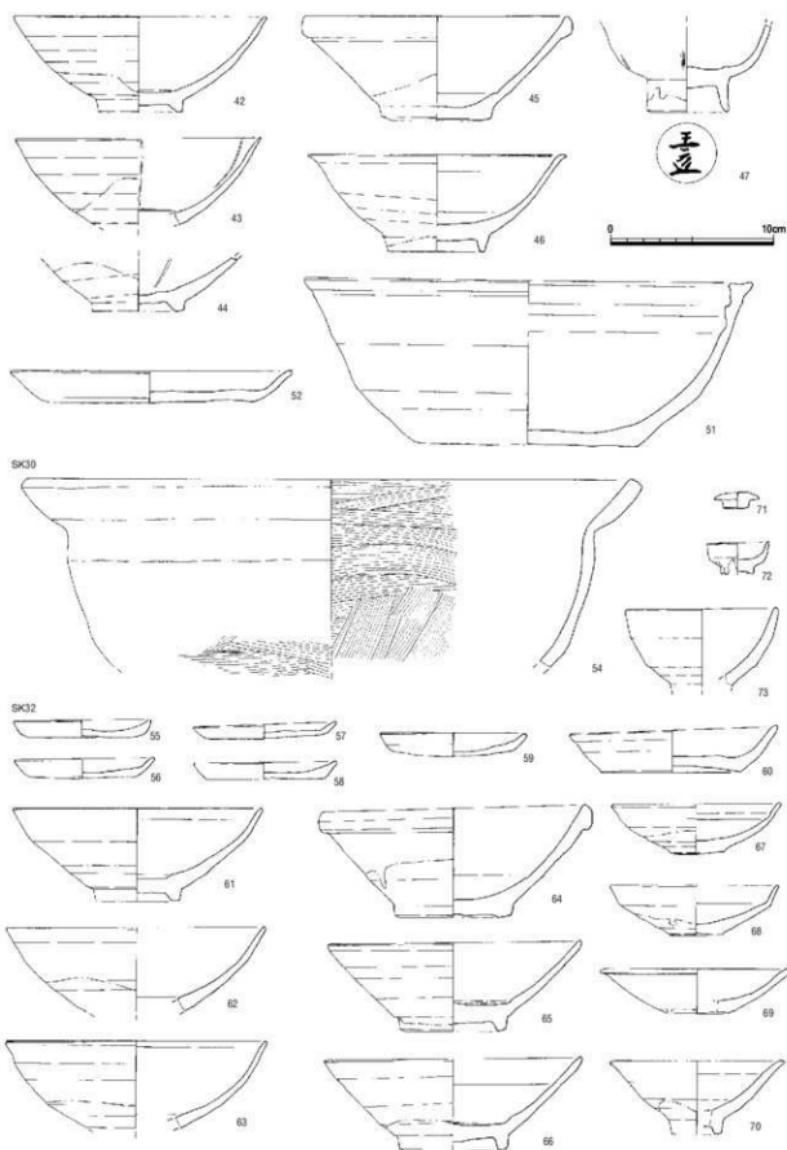
#### SK48 出土遺物（第20図）

白磁 碗（95）玉縁状口縁、幅広に浅く削る高台、内面の体部と底部の境に沈線をめぐらすIV-1a。

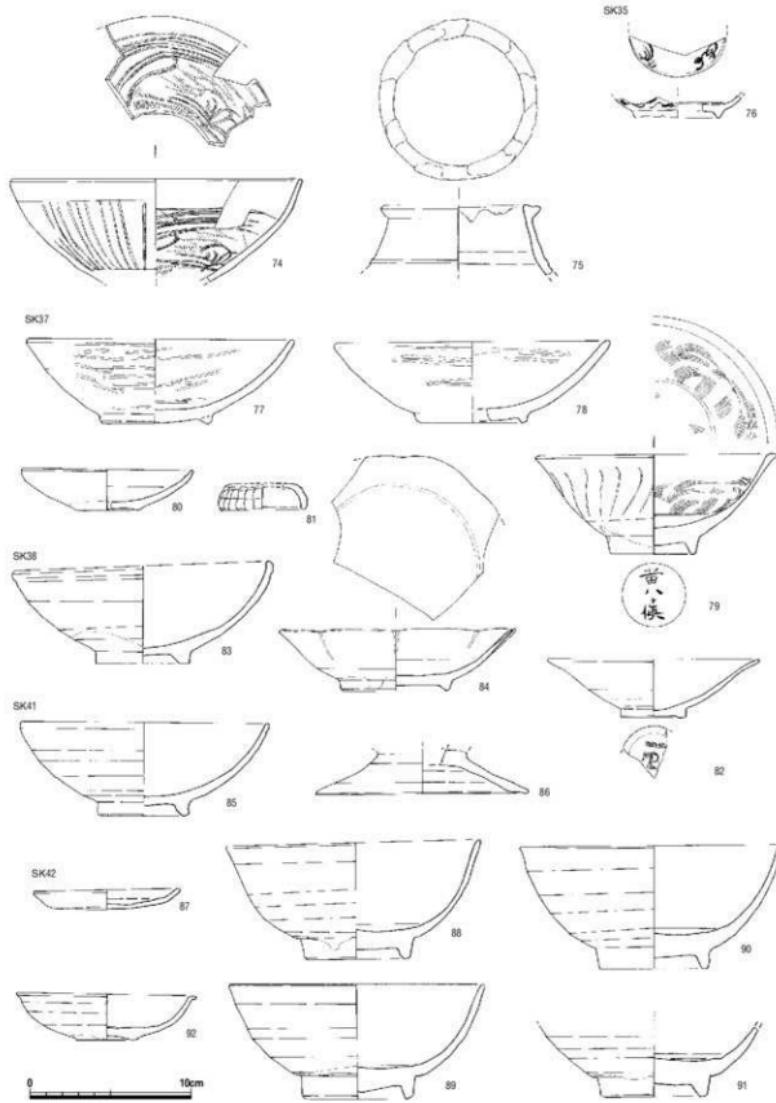
須恵器 鉢蓋（96）復元口径29.3cmを測る大型品である。

#### SK49 出土遺物（第20図）

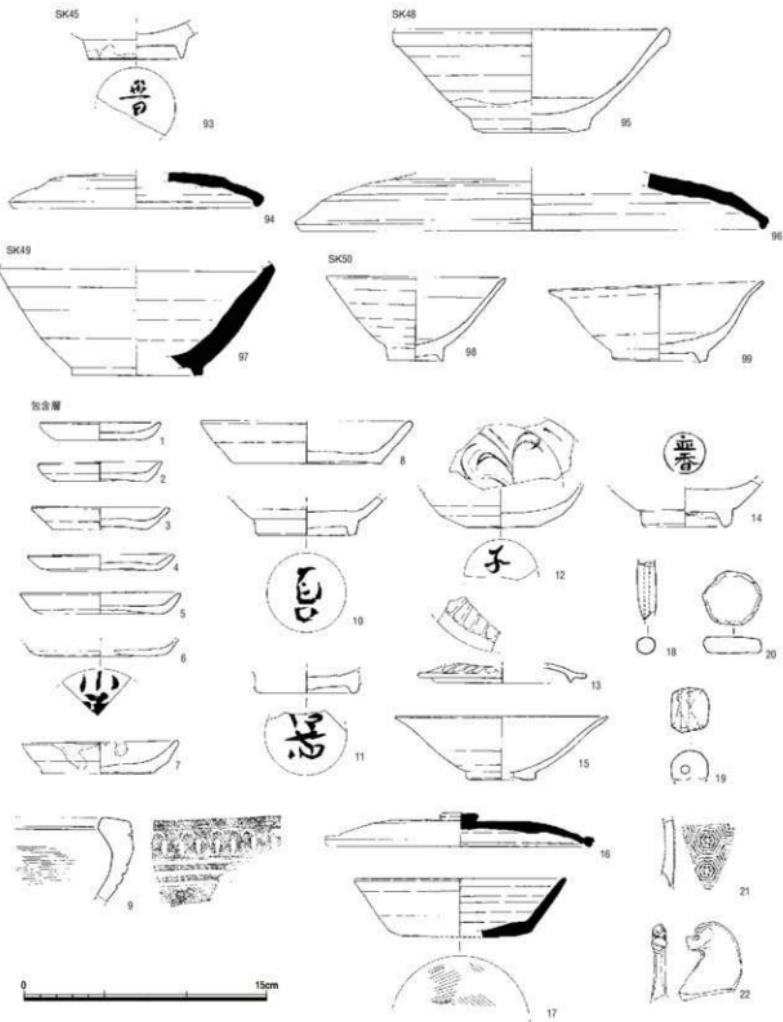
須恵器 長頸壺（97）肩部より上を欠失し、肩部と体部の境は鋭角に折れ稜をなす。体部外面は回転ヘラ削りを施す。



第18図 土坑出土遺物実測図11（縮尺 1/3）



第19図 土坑出土遺物実測図12（縮尺 1/3）

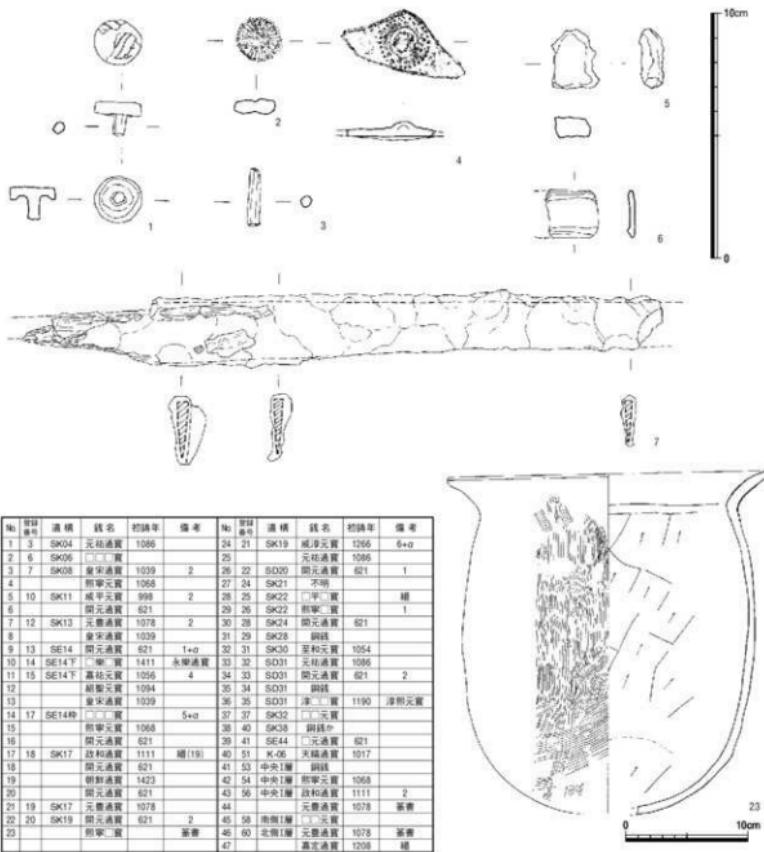


第20図 土坑出土遺物実測図13・包含層出土遺物実測図（縮尺 1/3）

SK50 出土遺物（第20図）

白磁 小碗（98）碗V類を小型化したものであるが、小碗特有の細く低い高台を削り出す。

青磁 小碗（99）粗製の高麗青磁で、口縁部は外反し、高台は断面台形に削り出す。内底見込みに沈圈線をめぐらし、その内側に目跡が輪状に残る。オリーブ灰色の釉が全面にかかる。胎土には黒色粒子を含み、器表では釉と反応しシミ状をなす。



第1表 銅錢一覧表

第21図 金属製品他実測図 (縮尺 1/2-1/4)

## 包含層出土遺物（第20図）

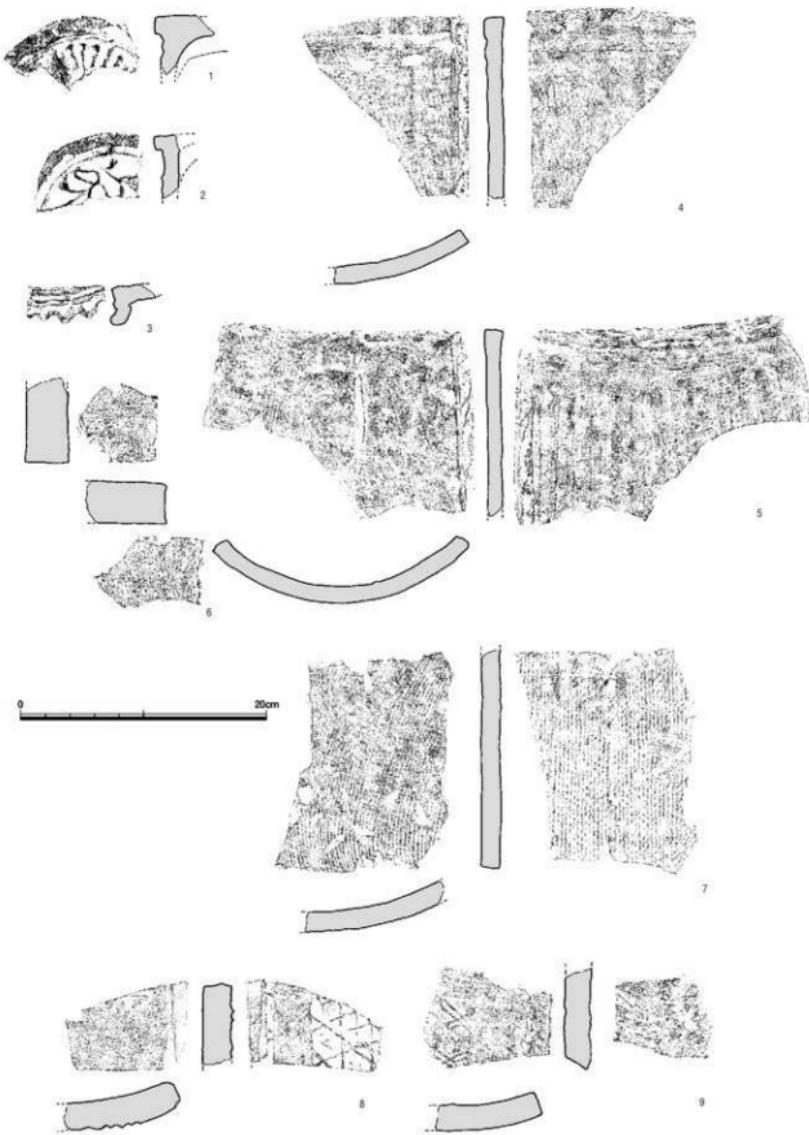
土師器 底部は糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（1～7）1～3はI層上面出土で、口径7.4～8.5cm、器高1.1～1.4cm、4はI層調査区南側出土で、口径8.9cm、器高1.0cm、5・6は調査区南西出土で、5は口径9.8cm、器高1.3cmを測り、6は口縁部を欠失し、外底に墨書きを記す。7はI層上面出土、口径9.6cm、器高1.9cmを測る深めの小皿で、口縁部内外面に煤が付着している。杯（8）口径13.0cm、器高2.6cmを測る。I層調査区南側出土。瓦質土器 火鉢（9）円形火鉢の口縁部で、内湾する口縁部の端部内面を拡張し、上端はやや外傾する。外面に連子文を印刻する。I層調査区中央出土。白磁碗（10・11）見込みの釉を輪剥ぎする底部片で、外面に墨書きを記す。

10はI層調査区中央出土。11は小碗もしくは高台付皿であろう。調査区南西出土。皿(12)体部中位で緩く屈曲し、その内面に段が付ぐVI-1bである。ヘラ描きで花文を施し、外底に墨書を記す。調査区南西出土。青白磁 小壺 蓋(13)身受けの返りを持ち、天井部外面に花弁を入れる。I層調査区南側出土。青磁 碗(14)ほぼ直立する角高台を削り出す底部片で、端部外面を面取りする。高台内側まで施釉され、内底見込みの体部との境に圓線ではなく、中心部分の径2.4cmの圓線内に「並香」の文字を配した印刻を入れる。圓線の周囲には不明瞭な花弁の様な印刻の断片がみられる。搅乱層出土。黒釉陶器 碗(15)倒傘形碗で、灰黄色の緻密な胎土に、黒色の釉を体部下位まで掛ける。I層調査区北側出土。須恵器 蓋(16)扁平な撮みが付き、口縁端部が短く立つ。I層調査区北側出土、杯(17)無高台の杯で、I層調査区南側出土。土錘(18-19)18は残存長3.5cm、最大径1.2cmを測る管状土錘で、I層調査区中央出土、19は全長2.7cm、最大径2.3cmを測る管状土錘で、I層調査区南側出土である。瓦玉(20)径3.5cm、厚さ1.0cmを測る円盤状土製品である。平瓦片を再加工したもので、I層調査区中央出土。土師器(21)器形は不明で、外面に亀甲文を印刻する。I層調査区中央出土。土馬(22)頭部から頸部にかけて残存する。I層上面出土。土師器 壺(第21図23)明確な掘り込みは確認できなかったが、包含層掘下げ時にぶれた状態で1個体出土した(SK46)。外反する口縁部の屈曲部内面には明瞭に棱が付き、長胴で胴部は張らない。外面には煤が付着している。胴部外面上半は縱方向、下半は縱あるいは斜め方向ハケ目、内面は斜め方向のヘラ削り、口縁部には横ナデを施す。

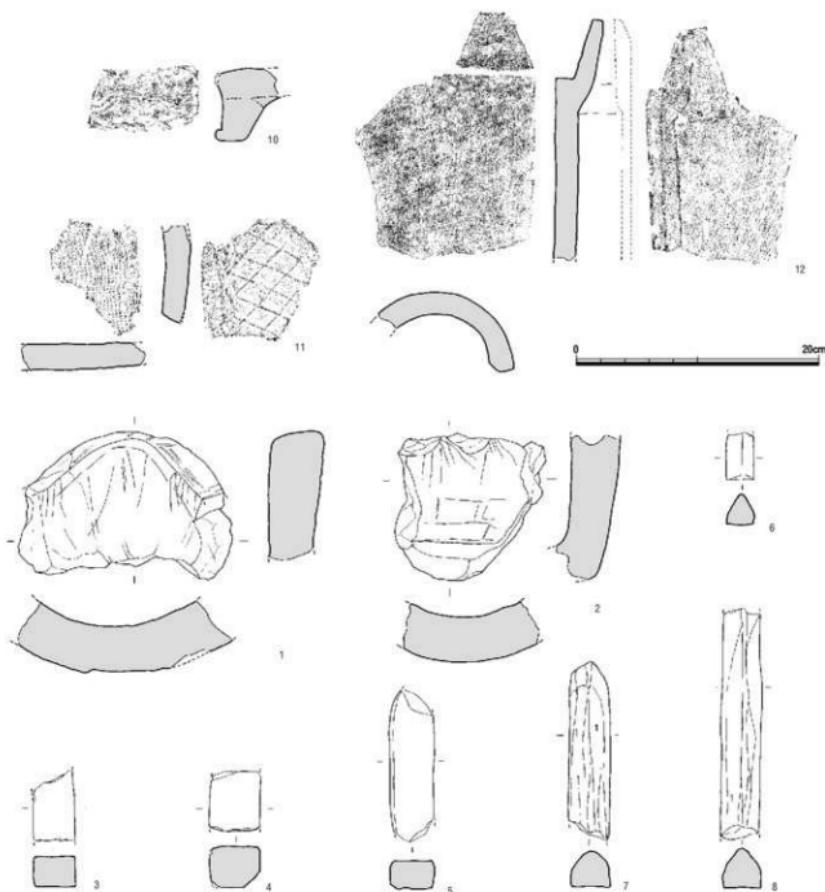
金属製品(第21図)1~6は銅製品、7は鉄製品である。釘隠し(1~3)1は鋸状を呈し、径1.9cm、厚さ0.6cmの円盤状銅製品で、断面六角形の径4mm、全長0.9cmの棒が付く。円盤の表面に文様を線彫りする。SD20出土。2は径1.9cm、厚さ0.6cmの円盤状銅製品で、表面に菊花文を鋳出し、その中央部がくぼむ。裏面は無文で、中央部がくぼむ。1と同様に棒が付いていたと推察される。SE14出土。3は最大径0.5cm、残存長2.4cmの棒状銅製品で、一端に向け細くなる。円盤状銅製品に付いていた可能性がある。SD20出土。和鏡(4)中心部に断面半円形の花蕊座紐をもつ鏡片で、鏡胎の厚さは1.5mmを測る。銅津(5)SK35出土。不明銅製品(6)団左側が欠損し、残存する右側は角を丸く、上下端は三角縁に仕上げる。はI層調査区中央出土。小刀(7)茎の他、刃部に木片が付着しており、木製の鞘に収められていたとみられる。SK42出土。他に、SK08から巻子軸先飾金具とみられる製品(図版3)が出土している。縁を直角に折り曲げ、径2.1cm、高さ3mmを測る。

銅錢(図版3・第1表)銅錢については第1表に示す。残存状態が良好なものはX線写真で示す。

瓦類(第22・23図)中国系瓦(1~6)1~2は花卉文軒丸瓦で、SK29出土。3は重弧文押圧波状文軒平瓦で、SK04出土。4~5は粘土板桶巻作りによる薄手の平瓦で、堅敏に焼成されている。凹面は布目、側縁から3~5cmのところに紐の痕跡が残る。凸面は繩目の叩きの後、粗く縱方向、側縁付近は横方向にナデ消している。側面は内面から1/3のまで刃物を入れ、分割の際の破面が残る。断面形はほぼ直角である。4がSK05、5はSK10出土である。6は厚さ3.5cmの磚の角の破片で、SK17出土。7~9は平瓦で、7は凹面が布目、凸面は繩目の叩きが残る。SK10出土。8~9はSK22出土、8は凹面に布目痕、凸面には斜め格子の叩きが残る。側面は端部を面取りする。9は凹面に布目痕、一部ナデ消し、凸面には二重斜め格子の叩きが残る。側面の断面形はほぼ直角である。10は唐草文軒平瓦で、文様部分が摩耗により不明瞭である。SK28出土。11~12はSE14出土、11は平瓦で、凹面に布目、凸面には斜め格子の叩きが残る。12は玉縁付丸瓦で、凹面に布目、凸面には繩目痕が残る。側面の内側が面取りされている。



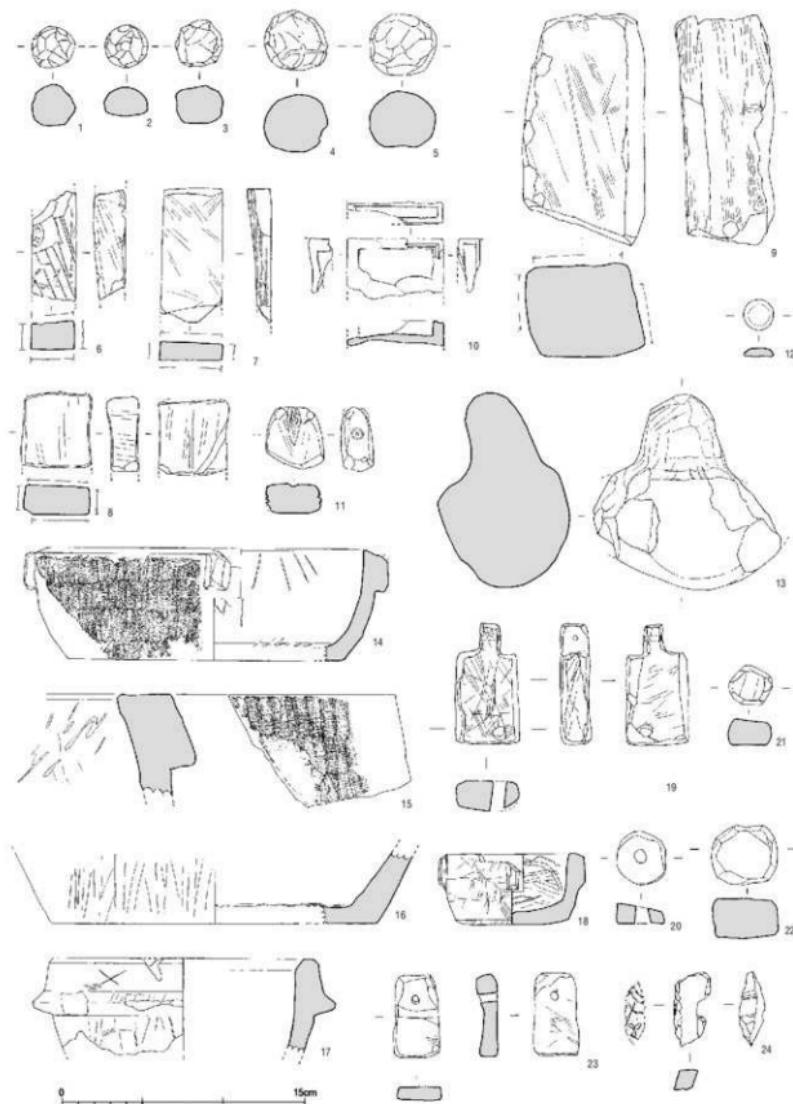
第22図 瓦実測図1 (縮尺 1/4)



第23図 瓦実測図2・鋳造関係遺物実測図（縮尺 1/4）

石製品（第24図）石礫（1~5）径2.5~3.7cmの球形に加工する。石材は砂岩である。1~SK23. 2~SK04. 3~SK21. 4~SK45. 5~SK08出土。砥石（6~9）6は残存長15.2cm、幅7.4cm、厚さ5.6cmの砂岩製で、4面を砥面とする。SK10出土。7は残存長6.8cm、幅2.7cm、厚さ3.6cmの玄武岩製で、4面を砥面とする。SK23出土。8は残存長8.2cm、幅3.8cm、厚さ1.5cmの粘板岩製で、4面を砥面とする。SK09出土。9は残存長14.2cm、幅7.4cm、厚さ5.8cmの砂岩製で、3面を砥面とする。SK10出土。

硯（10）残存長3.7cm、幅5.9cm、残存高1.4cmの海部を中心とした断片である。I層調査区中央出土。分銅状石製品（11）下部を欠失し、残存長3.8cm、幅3.5cm、厚さ1.9cmを測る。上部に径5mm孔を穿ち、挿入された鉄製金具が残る。両側面に穿孔を途中で止めた雑の跡がある。玄武岩製で、SK04出土。碁石（12）径1.8cm、厚さ0.5cmの黒褐色を呈する碁石で、SK07出土。用途不明



第24図 石製品実測図 (縮尺 1/3)

石製品（13）円礫の半分を加工し、把手状の突起を作り出す。玄武岩製で、石杵か。表面採取。滑石製石鍋（14~18）14・15は口縁部に縦耳が付く。14がSK06、15はSK03出土。16は底部片で、SE14下層出土。17は口縁下に鈎が巡る。I層上面出土。18は口縁部に縦耳が付く石鍋のミニチュアで、SE44出土。19~24は石鍋片を再加工したものである。19は全長5.0cm、幅2.9cm、厚さ0.8~1.2cmの短冊状の石板で、上部に長さ1.8cm、幅1.2cm、厚さ1.8cmの撮みを削り出す。撮みの横方向から径3mmの孔を穿つ。下部の穿孔は石鍋使用時のものか。SK17出土。20は径3.0~3.2cm、厚さ0.7~1.2cmを測り、中心に径0.7~1.2cmの穿孔がある円盤状石製品である。I層調査区北側出土。21・22は瓦玉に近い形状をとる円盤状石製品で、21は径2.6cm、厚さ2.0cmを測り、SK04出土。22は径3.0cm、厚さ2.4cmを測り、I層調査区北側出土。23は全長5.0cm、幅2.9cm、厚さ0.8~1.2cmの短冊状石製品で、上部に径5mmの孔を穿つ。K-01出土。24は撮み部分が欠失した楕円形のスタンプ状石製品で、印面には草花文が刻まれる。I層調査区北側出土。

#### 註

(1) 九州歴史資料館による太宰府分類（1978）では、白磁碗II類の大分類の定義として外面を直に、内面を斜めに高台を削り出し、小さな玉縁状口縁にするものとしている。軸下の化粧土掛けについてはふれていない。中分類では内底見込みの段がないものを1、あるものを2とし、2では口縁部が欠失した資料が図示され、破線で小さな玉縁状口縁に復元されている。その後蓄積された出土資料をもとに追加・修正された太宰府市教育委員会による分類の改訂版（2000）では、見込みに段が付くII-2の口縁について玉縁のものは図示されず、新たに4としてやや内溝した直口縁をもつものが設定されている。また、3として見込みに段がなく、やや内溝した直口縁をもつものが設定されているが、図示された資料の底部は欠失し破線による復元である。2-3については全形を知りうる資料がないのか、全形が図示されていない。博多遺跡群出土資料で見る限り、小さな玉縁状口縁が付く碗の見込みに段がなく、やや内溝した直口縁の碗の見込みには段が付く対応関係があり、後者については初出の時期が12世紀中頃まで下る。小分類では体部内面の堆錐による分割がないものをa、あるものをb、口縁部を輪花状にするものをcとするが、博多遺跡群出土例（220次調査SK06）では体部内面に櫛状工具で簡略な文様を施すものがみられた。

(2) 太宰府分類（1978）では、この形式の小碗を龍泉窯系青磁碗I-6とし、口縁部が外反するものをa、内溝するものをbとしている。I-6aが図示されているが、底部は欠失し、破線による復元はされていない。太宰府分類改訂版（2000）においても、同資料を図示する一方、同安窯系青磁小碗I類として、「体部の形は龍泉窯系青磁I類に近いが、高台形は同安窯系青磁の特徴を有し、底部外面中央は凸状に削られる。」と定義付けし、図示された資料は体部の器形・寸法が龍泉窯系碗I-6とほぼ同型同寸で、施文は簡略化され、外面は櫛目による条線のみでヘラ描き文様なく、内面はヘラ・櫛状工具を用いて簡略化された花弁を表している。軸は外面中位から下位にかけて掛けられている。高台の形状や施釉については同安窯系通有の特徴をとっている。博多遺跡群224次調査SK07出土青磁小碗は体部の特徴は龍泉窯系碗I-6aと一致し、緻密でない胎土、底部の形状、高台盤付まで施釉されない点については同安窯系小碗I類に近い。この型の施文について外面を蓮弁、内面を蕉葉文とする記述がみられるが、具象化した植物の種類の特定はできない。

#### ◆参考文献

横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館 研究論集4』1978

山本信夫「太宰府条坊跡XV」—陶器系分類編—太宰府市の文化財第49集2000

「博多—高速鉄道関係調査(I)」博多出土貿易陶磁分類表 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊1984

博多172—博多遺跡群第220次発掘調査報告—福岡市埋蔵文化財調査報告書第1415集2021

## IV 小 結

今回の調査でまとまった量の土器や陶磁器が出土し、年代推定が可能な遺構は以下の通りである。

11世紀後半～	SK29	12世紀中頃	SK07
12世紀後半～	SK01/11/17/21/25/32 SD31	14世紀前半～	SK13/17上
14世紀後半～	SE14/44	16世紀	SK35

遺構が最も密に分布していたのは12世紀後半である。博多遺跡群は中世前半において大陸からの物資の門戸として、宋商人が居留し、交易船から積み下ろされた物資の一大集散地とされる。遺構や包含層から出土する膨大な量の宋代の陶磁器は、博多が交易の拠点であった物的証拠とされる。宋商たちが構えた店舗や倉庫について明確にそれと断定できる遺構は検出されていないが、これまでの発掘調査では第56-79・209・220調査など陶磁器が大量に廃棄された遺構が多く検出されている。荷下ろしした積荷を開梱した際に、梱包に用いた緩衝材が不十分であったためか、輸送の過程で破損した品を取り除き廃棄した事例の他、火災による破損品を廃棄した事例もあった。

今回の調査で検出したSK07土坑からは12世紀中頃の中国陶磁片が大量に出土し、その後の接合作業で陶器 壺・鉢・盤片は完形に近い残存率で数多くの個体を復元することができた。それらは二次的な被熱により器面がただれているものがほとんどで、火災に遭って破損したものを廃棄したものである。青磁 碗、白磁 四耳壺、陶器 四耳壺・こね鉢には同一型式のものが多くみられた。これらは博多に居留する人々の什器としてではなく、店舗もしくは倉庫で商品もしくは商品の容器として国内に流通する直前に被災し、廃棄されたものと考えられる。内容物は1点の壺から炭化米30gを検出したのみで、そのほとんどは被災した際に失われたものであろう。陶磁器の組成をみると、磁器 碗では白磁が占める比率が圧倒的に高い。玉縁状口縁で内面の体部と底部の境に沈線をめぐらすIV-1a類は12世紀前半に広くみられるが、内底見込みに段が付くII-4、口縁端部を嘴状にするV-4、体部から口縁部まで直線的に延び内底見込みの軸を輪刺ぎするⅣ-2はやや後出し12世紀中頃に初出する。青磁は12世紀前半には出現している高麗中期青磁の他、同安窯系青磁が出土しているが、後者は高台の削り出しが粗く、胎色の透明釉が体部外面中位まで掛かる特徴をもつ12世紀後半に多く出土する典型的なものとは異なり、龍泉窯系のように高台が断面四角形に削り出され、高台付近まで施釉されるものである。龍泉窯系では無文碗が出土しているが、腰が張らず、碗I類とは形態を異にする。小碗についても龍泉窯系とも同安窯系とも分け難い特徴を示し、大宰府分類龍泉窯系碗I-6の口縁部が外反するI-6aと図示されている資料に口縁部から体部まで形態が一致するが、図示された資料のは底部が欠失しており、破線による復元もなされていない。大宰府分類改訂版（2000）においても、同資料を図示する一方、同安窯系小碗I類として、「体部の形は龍泉窯系青磁I類に近いが、高台形は同安窯系の特徴を有し、底部外面中央は凸状に削られる。」と定義付けし、図示された資料は体部の器形・寸法が龍泉窯系碗I-6とほぼ同型同寸で、施文は簡略化され、外面は櫛目による条線のみで花弁の輪郭を表すヘラ描き文様がなく、内面はヘラ・櫛状工具を用いて簡略化された花弁を表している。外面中位から下位にかけて施釉される。SK07出土の小碗は高台の形状や施釉、緻密でない胎土、底部の形状、高台疊付まで施釉されない点など同安窯系通有の特徴をとっている。

SK07出土磁器の組成をみると、後出する型の白磁、竜泉窯系とも同安窯系とも分け難い青磁など12世紀前半の白磁単純期（但し、初期龍泉窯・耀州窯・高麗中期青磁などわずかに出土）から12世紀後半の無文画花の龍泉窯系や同安窯系青磁類出期へと移行する過渡期の一括資料といえる。



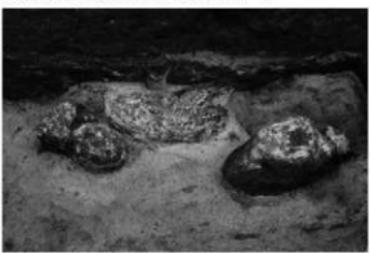
1.博多遺跡群第224次I層上面南（北東から）



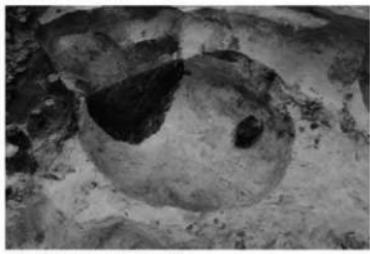
2.SK07b土坑遺物出土状況（西から）



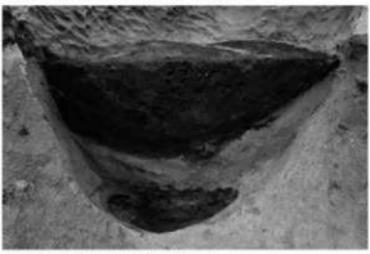
3.SK05土坑（南東から）



4.SK05土坑貝殻出土状況（北西から）

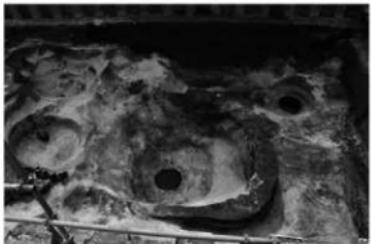


5.SK07土坑（北西から）

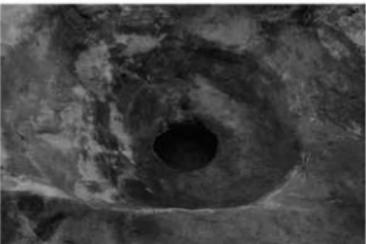


6.SK32土坑土層（北西から）

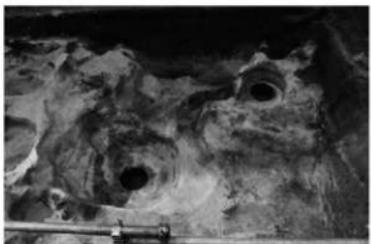
図版2



1.SE14井戸・SD20溝（北東から）



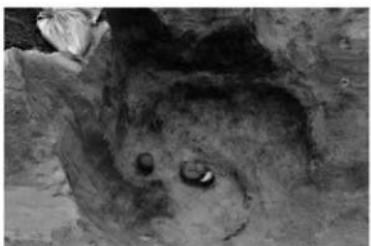
2.SE14井戸（北東から）



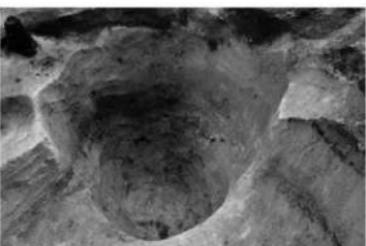
3.SE14井戸・SD20溝掘下げ（北東から）



4.SK21土坑土層（南から）



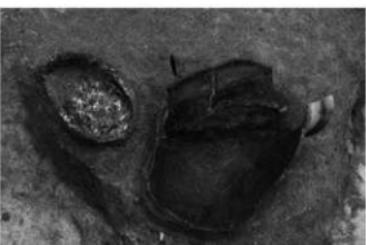
5.SK21土坑（南西から）



6.SK32土坑（西から）



7.博多遺跡群第224次Ⅰ層上面北（北西から）



8.SK46土坑遺物出土状況（南東から）



1.LSD04溝（北西から）



2.SE44井戸土層（南東から）



10.



12.



31.



32.



51.



SK08

出土銅製品・銅錢X線写真

## 報告書抄録

ふりがな	はかた 181							
書名	博多 181							
副書名	博多遺跡群第224次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1448集							
編著者名	佐藤一郎							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2022年(令和4年)3月24日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
博多遺跡群 (第224次調査)	福岡市博多区沿岸 町450番、451番	40132	121	33° 35' 42"	130° 24' 42"	20190131 ~ 20190419	175	記録保存
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
博多遺跡群	集落	古代・ 中世	井戸・土坑・溝	土師器・ 陶磁器・ 石製品・ 金属製品				
要約	<p>博多遺跡群は福岡平野の中央、那珂川口部右岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地する。調査地は博多遺跡群の南西部、第90次調査地の北側に位置する。標高3.5m前後の灰褐色砂上面で検出した遺構は、調査区中央～北側で12世紀前半の大溝（幅3.0m、深さ2.0m）の屈曲部分、その埋没後に掘込まれた13c後半の井戸、大溝と前後する12世紀の（廃棄）土坑をその南東で18m、北西で8mで基線とした。下面では、ピット状遺構数個の他、8世紀の溝1条を検出したが、後世の遺構に切られ断片に残るのみである。12世紀中頃の土坑（径2.0m、深さ12m）からは二次的に然を受け破損し廃棄された中国陶磁器片コンテナ10数箱分が出土した。土師器片はごく少数で、陶磁器のうち碗は白磁が大半を占め、少數青磁片がみられる。廃棄土坑から大量に出土した陶磁器片は火災に遭い、破損したものが廃棄されたものであろう。碗の他、壺も多様で、良好な一括資料である。下面で検出した溝は第90次調査で検出された溝と方位・規模をほぼ同じくし、の延長とみられる。方位はN45°～Wに取る。</p>							

## 博多 181

— 博多遺跡群第224次調査報告 —  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1448集

2022年(令和4年)3月24日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目1番8号

印 刷 株式会社インテックス福岡  
福岡市博多区東那珂1丁目15番1号